

令和4年度

# 奈良教育大学 ESD 学生活動報告書



2023年3月

近畿 ESD コンソーシアム

国立大学法人奈良国立大学機構 奈良教育大学

## はじめに

奈良教育大学 ESD・SDGsセンター長 中澤 静男



今年も、ESD学生活動報告書ができあがりました。本報告書は2回生の苗代昇妥さん、1回生の田中愛花さん、吉岡優来さんの3人が編集委員となって、膨大な量のポートフォリオから作品を選出し、まとめてくださいました。大変だったと思いますが、よくがんばってくれました。

本報告書を読むと、小学校の野外活動支援や、富雄公民館におけるワークショップ、イオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップなど、私自身も参加させていただきましたが、コロナ禍の中にもかかわらず、よくやっていると感心するばかりです。学生によるESD活動の中心を担っていたのは、ユネスコクラブです。今年度は川田大登さんを中心に、中家麻弥さん、苗代昇妥さんのチームで100名近いクラブを企画・運営してくださいました。ありがとうございます。

大学生の4年間は、人生にとって特別な期間だと思っています。私自身、今も大学時代の友人と連絡を取り合っていますし、たまに会うと、気分は19歳に戻ります。大学生というセンシティブな期間に、誰と出会うか、何を体験するか、何に挑戦するかがとても大事なのでは、と思っています。本報告書には自ら求めて体験した一人一人の声が記されています。それを読むと、すぐにタイムスリップできることでしょうか。一つ一つの活動には、「型」といったものがなく、「自由」であったものの「不安」もあったと思いますが、「やってみたらできた」「けっこう楽しかった」という経験だったのではないのでしょうか。

ESDにも「定型」はありません。これでいいのかと迷うこともあるかもしれませんが、迷って何もしないより、挑戦する方が自分にとっても、子どもたちにとっても、そして地球にとってもいいことはまちがいありません。昔の近江商人は「売り手よし、買い手よし、世間よし」をモットーにしていますが、ESDでは「わたしよし、子どもよし、地球よし」といったところでしょうか。

コロナは予想した以上に、学生生活に影響をおよぼしています。コロナは今後も続くでしょうが、コロナで大学時代を無にしてしまうのはもったいない。全国からESDを学びたい学生が、奈良教育大学に集まっています。共通する目標を持つ仲間と一緒に、これからも体験の幅を広げ、中身の濃い大学生活をおくってください。



## 目 次

はじめに	1
目次	2
アースデイ奈良 2022	3
済美小学校野外活動支援	5
伏見小学校野外活動支援	8
ならやま小学校野外活動支援	9
あすかばんど野外活動支援	11
富雄公民館におけるワークショップ	14
イオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップ	15
都跡小学校野外活動支援	17
ESD/SDGs センターキックオフイベント	19
アースデイ奈良 2022 におけるボランティア	21
イオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップ	22
外国人留学生懇談会におけるアंकロン演奏	23
附属幼稚園の東大寺遠足引率支援	24
東大寺寺子屋	25
西大寺北小学校野外活動支援	27
済美小学校野外活動支援	28
陸前高田市文化遺産調査団	29
県内大学生が創る奈良の未来事業の継続事業	31
あつまれ ECO キッズ!	32
近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会	34
春日山原始林・奈良公園フィールドワーク	35
学ぶ喜び・ESD 連続公開講座	38
ESD・SDGs 連続オンラインセミナー	43
森と水の源流館授業づくりセミナー	45
万葉文化館授業づくりセミナー	49
奈良 ESD 連続セミナー	53
編集後記	63

## 【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

### アースデイ奈良 2022 活動報告書

英語教育専修 2 回生 苗代 昇妥

1. 日時 2022 年 4 月 23 日（土） 7 : 00 ~ 16 : 00
2. 場所 奈良公園
3. 参加者 教育学専修 3 回生 木下 結等  
社会科教育専修 3 回生 北野 結衣  
英語教育専修 3 回生 川口 綾菜  
英語教育専修 3 回生 河野 木香  
英語教育専修 2 回生 苗代 昇妥  
書道教育専修 2 回生 栗垣 実咲

#### 4. 活動の概要

2022 年 4 月 23 日（土）に奈良公園でアースデイ奈良 2022 が開催された。本イベントは「2030 年のゴールまであと 8 年～サステナブルを奈良から発信する～」をテーマに行われ、「ゴミを出さない」など環境に配慮した形で開催された。様々な団体がブースを出店し、幅広い方々の参加があった。奈良教育大学ユネスコクラブは、本イベントにボランティアスタッフとして参加し、環境に配慮した持続可能なイベントの当日運営を行った。



アースデイ奈良で司会を行う学生

#### 5. 参加学生の学び・感想

4 月 23 日（土）にアースデイ奈良 2022 に参加した。私はステージの司会担当を中心に活動させていただいた。このイベントに参加して一番感じたこととして人とのつながりが挙げられる。イベントに参加した人、イベントをつくってきた人、当日ボランティアとして参加した人、様々な人たちが同じ場所に集まり一つのテーマ（地球のこと、環境のことについて）を考えることが出来たのはとても意味のあることだったと思う。特にコロナ禍でこのようなイベントを成功させることが出来たのは自信にもつながった。今後も積極的に活動に参加していきたいと考えている。

（教育学専修 3 回生 木下 結等）

アースデイ奈良 2022 に参加し、環境に対する自分の行動を見直すことができた。毎日当たり前のように、プラスチック容器を使い捨てている現状がある。それは、衛生面や捨てやすさが背景にあるのだが、今一度振り返ると本当に使用する必要がある場合は少ない。環境について考えるだけで終わっている現状から抜け出し、行動に移していかなければならないことを痛感した。現在や少し先の未来だけを見てはいけなことを改めて考えることができた良い機会だった。

（社会科教育専修 3 回生 北野 結衣）

アースデイを通して、意識することの大切さを学んだ。イベントには大人や子ども、外国の方など多くの人々が参加していた。多様な人々に関わる中で、環境問題に関心がある人や環境のために活動している人が奈良にたくさんいることを知り、触発された。イベント中もイベント後もゴミ一つ落ちておらず、人々の意識の高さを実感した。また、プラスチックなどのゴミをそもそも出さないための工夫もされていた。例えば、食器をレンタルできる制度や空き箱や鉛筆、麻紐の利用などだ。少し意識して行動を変えるだけで環境への影響が変わると分かった。今後は私も普段から意識して行動しようと思う。

(英語教育専修3回生 川口 綾菜)

アースデイ奈良 2022 にボランティアとして初めて参加した。サステイナブルを念頭に、ゴミを出さない、マイ食器やマイバッグを持参する、使用しない物品や環境に優しい製品を景品として提供するなど、参加者のみなさんの環境に対する意識の高さを実感した。また、環境に配慮して生活するとはどういうことかを体験することができた。今回の参加で学んだことを踏まえて、今後は普段の自身の行動に目を向けて、自分が環境のために出来ることは何かを、より意識して行動していきたい。

(英語教育専修3回生 河野 木香)

私にとってボランティアとしてイベントに参加するのは今回が初めてだった。イベントに運営側として参加することで、今までは分からなかったことをたくさん知ることができたが、特に環境を守るための意識と行動の面で刺激を受けた。イベント運営についてごみを出さないことや、環境に配慮して運営することを徹底されており、自分の行動を見つめ直すきっかけとなった。自分でもできる小さな行動を少しでもたくさん行いたいと思う。

(英語教育専修2回生 苗代 昇妥)

私はステージ司会としてアースデイ奈良 2022 に参加させていただいた。私がこのイベントを通して、イベントを企画・運営するということは計り知れない時間や人手が必要で、注意を払わなければならないこと、数知れない問題点をすべて把握し、解決していかなければならないことを学んだ。だがその分、多くの人と役割分担をし、全員が最善を尽くすことで大きな力が生まれ、イベントを成功させることができるということも学んだ。

今回の参加を通して私は大きく成長することができたと確信している。今回学んだことを活かし、今後も積極的に様々な活動に参加していきたいと考えている。

(書道教育専修2回生 栗垣 実咲)

## 【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

### 済美小学校野外活動支援 活動報告書

英語教育専修 3 回生 川口 綾菜

1. 日時 2022 年 5 月 26 日（木）17:20～21:00
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
3. 参加者 音楽教育専修 4 回生 佐藤 こころ  
教育学専修 3 回生 中家 麻弥  
社会教育専修 3 回生 北野 結衣  
英語教育専修 3 回生 川口 綾菜、河野 木香、福西 隆生  
英語教育専修 1 回生 黒柳 新奈、山本 侑大  
特別支援教育専修 1 回生 神吉 優利奈、才田 優佳  
幼年教育専修 1 回生 田中 花璃

#### 4. 活動の概要

2022 年 5 月 26 日に奈良市青少年野外活動センターで、奈良市済美小学校 5 年生の野外活動の支援を行った。具体的な活動は、キャンドルファイヤーの準備・片付け、子どもたちの安全確保・活動支援、スタンプの実施などである。スタンプは三つ準備し、あわせて 20 分間、子どもたちと楽しんで行うことができた。

#### 5. 参加学生の学び・感想

私は、野外活動支援を通して、学生が子どもたちのお手本になることの重要性を学んだ。子どもたちのスタンプの際、学生が盛り上げたり、心の底から楽しんだりすることで子どもたちのお手本となり、子どもたちのキャンプファイヤーへの意欲を高めることにつながると考える。また、野外活動支援を行う中で、子どもたちの集中力が切れる場面が多く見られた。そのような中、学生がスタンプをしたり、一緒に楽しんだりすることで子どもたちの集中力を維持させることができた。この経験から、子どもたちのお手本となるような働きかけをすることで、子どもたちの意欲につながるということを学んだ。今回、学んだことをこれからの学生生活に生かしていきたい。

（音楽教育専修 4 回生 佐藤こころ）

私は今回の野外活動支援を通して、野外活動は子どもたちのことを考えて行うことが前提であるということを知ることができた。当たり前のように思っていたが、実際スタンプを考えていく過程では、スタンプを上手く作りたい、失敗したくないという気持ちが大きく、自分たちのことばかりを考えスタンプをすることに夢中になってしまうことが多かった。しかし、先生や先輩のアドバイスを聞いて、野外活動は子どもたちのためのものであり、子どもたちに分かりやすくするためにはどうすれば良いか、安全面はどう対応するのかなど、子どもたちのことを考えなければならないということに改めて気づいた。子どもたちのための野外活動であることを意識して、声掛けの仕方や安全面の配慮をもっと考えていく必要があると学ぶことができた。

（教育学専修 3 回生 中家 麻弥）

今回の野外活動支援を通し、盛り上げることの重要性を知ることができた。児童がスタンプを行っている際に盛り上げることはもちろん、私たちが行ったスタンプでも同様のことが言える。掛け声、歌声、ガヤ、手拍子、大きく動く等数えきれない程、盛り上げるといっても種類があることを学び、全体で楽しい雰囲気にするためには必要不可欠であると知った。今後活動していく上で、今回得た盛り上げ方とその必要性を忘れず、積極的に盛り上げていきたい。

(社会科教育専修3回生 北野 結衣)

私は、野外活動支援を通してスタンプの重要性を学んだ。今回スタンプの古今東西で失敗した子どもが泣いてしまうという場面があった。周りの子どもたちや先生が声をかけたが泣き止まず、もう参加したくないと言っていた。しかし、次の私たちのスタンプは子ども主体で気軽に体を動かせるもので、その子どもは満面の笑顔で参加していた。その後、自分のスタンプや再度行った古今東西でも泣かずに取り組み克服することができた。この経験から、スタンプは子どもを笑顔にしたりやる気にしたり成長させる効果があるのだと学んだ。

(英語教育専修3回生 川口 綾菜)

今回の野外活動支援を通して、小学生との接し方や声の掛け方など、支援する立場としての雰囲気づくりの大切さを学ぶことができた。野外活動支援に参加するのは初めてであり、スタンプをするにあたって大きな声を出したり、周りの小学生とコミュニケーションを取ったりするのが難しいと感じる場面も多々あった。しかし、自分なりに工夫したり、練習を繰り返したりするなど、改善しようと努力することの大切さを改めて感じることができた。この経験で得たことを忘れず、今後も様々な活動に取り組んでいきたい。

(英語教育専修3回生 河野 木香)

今回の支援活動における自分の反省点として、スタンプを行う側も参加する側も気持ちよく活動するためにどうやって声掛けを行うかが挙げられた。普段と異なる環境で興奮しているのか、つい発言が乱暴になる児童や周囲の状況が見えにくくなっている児童が多く見られた。子どもたちの気持ちを冷めさせてしまうことなく、誰もがそれぞれの立場から相互に楽しみ、楽しませられるような活動のための声掛けを考えることが課題であると認知した。

(英語教育専修3回生 福西 隆生)

初めて野外活動支援をさせてもらったので不安もあったが、先輩方が丁寧に教えてくださったり、みんなが支えてくれたりしたおかげで成功させることができた。練習の時から色々と学ぶことが多かった。奈良ユネスコさんのスタンプを見た時に自分にはできるか不安だったが、自分の担当スタンプのときに周りの方が掛け声をして下さったりしたので、私もすることができた。本番は練習では想定していなかったことが起きたり、小学生のスタンプをどう盛り上げるか、あまりスタンプに参加する気がなさそうな子にどう寄り添って声かけをすれば良いかがわからなかったりしたりと、まだまだ学ばなければなら

ないことも多いが、今回の野外活動支援で子どもたちが楽しんでくれたので頑張った良かったと思った。次の野活ではユネスコのスタンプ以外の部分でどのように対応したら良いのかを考え、より盛り上げられるようにしたい。

(英語教育専修1回生 黒柳 新奈)

今回、初めて野外活動支援に参加させていただいた中でたくさん学ぶことがあった。中でも私が特に難しかったと思うことは、スタンプに参加している子どもたちとのコミュニケーションだ。とてもはしゃいでいる子どもや、逆にぼかーんと上の空の子どもなど、多種多様な子どもたちとの意思疎通をすることに頭を悩ませた。そのため、次からは様々なパターンを想定して子どもたちと関わっていきたいと思う。また、子どもたちと上手に触れ合っていくには、ある程度場数が必要だと思ったため、またこのような機会があれば参加したいと思う。

(英語教育専修1回生 山本 侑大)

今回、初めて野外活動支援に参加させていただき、練習から本番まで学ぶことがたくさんあった。練習ではスタンプ自体の流れだけでなく、周りの子どもの反応も予想しながらの構想の難しさを学んだ。当日には、子どもたちが騒いでしまった時にどう対応したら良いのか、上手く参加出来ていない子どもが参加しやすくなるにはどうしたら良いのか等、実際にやってみて発見した学びがあった。分からないことを先輩方が優しく教えて下さったり、参加した皆と協力して活動できたりしてとても良い経験になった。次回参加する時は今回の学びを活かしたい。

(特別支援教育専修1回生 神吉 優利奈)

正直、キャンプファイヤーの裏方をするのだと思っており、スタンプをすると思っていなかったため、驚きから始まった。私は人前に立って話をしたり、指示を出したりすることが向いていないと思う。そのため、特別支援学校での勤務を考えていた。しかし、今回の野外活動を通して、人前で何かをすることに少し自信が付いた。また、特別支援学校だけに限らず、普通の小学校での勤務も視野に入れるようになった。自分の将来の選択肢を広げてくれた野外活動にとっても感謝している。また、支えてくださった先生、先輩方、同学年の仲間にも本当に感謝している。

(特別支援教育専修1回生 才田 優佳)

今回のボランティア体験では、練習時から多くのことを学んだ。特に、周りで声かけをする人がいて初めて場が盛り上がることを目の当たりにできたのが大きかった。場の空気は、私自身も含めてみんなで作っていくものであることを感じられた。本番は、ぼーとしている子どもや、馴れ馴れしく話してくれる子どもなど、色々な子どもがいるなかで、子どもとの距離感をどこに設定しようか悩んだ。どの子どもも安心できる空間作りを目指すことが、私の当面の目標だ。

(幼年教育専修1回生 田中 花璃)



**【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】**  
**奈良市立伏見小学校野外活動支援 活動報告書**

国語教育専修 3 回生 川田 大登

1. 実施日 2022 年 7 月 1 日 (金)
2. 場所 奈良県立野外活動センター
3. 参加者 幼年教育専修 4 回生 井原 奈佑  
英語教育専修 4 回生 稲富 麻莉  
英語教育専修 3 回生 福西 隆生  
家庭科教育専修 3 回生 宇和谷 紗恵

**4. 活動の概要**

2022 年 7 月 1 日に奈良県立野外活動センターにて、奈良市立伏見小学校 5 年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、勾玉づくりの補助、アスレチックの補助、スタンプ指導であった。

**5. 参加学生の学び・感想**

私はスタンプ班を担当した。野外活動センターの方がキャンプファイヤーで行うスタンプを実践してくれて、子どもたちの様子を見守りながら一緒にスタンプを行った。初対面の子どもたちへの関わりはやはり難しかったが、ゲーム内で「せーのっ!」といった声かけや体を大きく動かしたりして、子どもたちが少しでも楽しめるように働きかけることを心がけた。子どもたちにとっては一生に一度の野外活動を学生という立場から盛り上げ、楽しませられるように今後の野外活動支援でももっと動きたいと思う。

(英語教育専修 4 回生 稲富 麻莉)

私は勾玉づくり補助を担当した。縦 4 cm・横 4 cm・高さ 1 cm程の大きさの石を目の粗さが異なる 3 種類の紙やすりで削って形作り、ひもを通すための穴を錐で開けるという作業の説明やアドバイスを一人一人に行った。児童自身で簡単に作る方法を見つけたり、友達にコツを教えてあげたりと協力しながら作成する様子を見て、児童の考える力を育むために、教師がどこまで説明するかを考えなければならぬと感じた。また、先生方の対応を見て、美しい勾玉を作ることが目的ではなく、一つのを自身の力で完成させるということが目的であると感じた。時間が限られている中で、誰一人諦めることなく集中して取り組み、目的を達成できていたと考える。

(家庭科教育専修 3 回生 宇和谷 紗恵)

**【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】**  
**奈良市立ならやま小学校野外活動支援 活動報告書**

英語教育専修 3 回生 河野 木香

1. 実施日 2022 年 6 月 23 日 (木)
  
2. 場所 奈良市青少年野外活動センター
  
3. 参加者 音楽教育専修 4 回生 佐藤 こころ  
幼年教育専修 4 回生 井原 奈佑  
音楽教育専修 3 回生 梅原 彩華  
英語教育専修 3 回生 川口 綾菜、河野 木香、福西 隆生

#### 4. 活動の概要

2022 年 6 月 23 日に奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市立ならやま小学校 5 年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、オリエンテーションの補助、キャンプファイヤーの準備・片付け、スタンプの実施などである。

#### 5. 参加学生の学び・感想

私は、児童のそばにいることの重要性を学んだ。私は、野外炊飯の支援に参加するのは今回が初めてだった。そのため、活動に集中出来ていない児童にどのように声をかけたら良いのか分からなかった。そこで、児童のそばにいることを優先した。そうすることで、児童の思いについて聞くことができ、児童に寄り添った言葉を掛けることができた。この経験から、児童に寄り添い、思いを聞くことは、円滑に活動に参加させるために必要なことだと学んだ。今回学んだことをこれからの学生生活に生かしていきたい。

(音楽教育専修 4 回生 佐藤 こころ)

今回私は、キャンプファイヤーのみの参加だったので、短い時間で子どもたちに楽しんでもらえるような関係を作らなくてはいけなかった。その為、空いている時間は積極的に話したり交流を持つことで少しでも、「全力で楽しんでいいんだ」と思って貰えるように取り組んだ。キャンプファイヤーでは、子どもたち自信が盛り上げよう、楽しもうという空気が感じられ、それが出せる雰囲気作りというのが大切だと改めて感じた。

(幼年教育専修 4 回生 井原 奈佑)

私は、はじめての野外活動支援だった。私自身小学校で経験したものの、支援する立場になると子ども達が迷子にならないか、怪我しないか、などとてもハラハラが止まらなかった。しか

し、子どもたち自身で様々なことに気づき、悩んだり、考えたりして、協力して取り組む姿を見ることができた。私は大学の授業の関係上前半部分のみの参加であったが、今まで学校の学習から学んだことを実践する姿を見せてもらい、子ども達にやらせてみて考えさせることの大切さを学ばせてもらえる機会となった。

(音楽教育専修3回生 梅原 彩華)

今回の活動を通して、野外活動支援とは何かと考えさせられた。野活支援はあくまでもその日だけの支援であるため、自分は児童にとって信頼関係もない他人であるということを自覚し、先生と児童の関係を壊さないように働きかけることが大切だと感じた。また、私は今回初めて屋外でのキャンプファイヤーを経験したのだが、出し物で上手く場を盛り上げることができなかった。児童にとって良い思い出となるよう、これから練習や経験を重ね、支援のあり方を模索していきたい。

(英語教育専修3回生 川口 綾菜)

今回の野外活動支援は、子どもたちのオリエンテーションの補助のみの参加であったが、子どもたちとの関わりのなかで学ぶことがたくさんあった。そのなかで、活動支援の立場として、子どもたちとどのような距離感で接するのが適切かを考えるきっかけとなった。子どもが積極的に話しかけてくれることはとても嬉しいが、一方で親しく話すことだけが支援ではなく、時には注意をするなど、状況に応じた適切な接し方を常に考えて行動する難しさと重要さを学んだ。一つひとつの支援活動から得られる学びや発見を大切に、今後の支援活動に活かしていきたい。

(英語教育専修3回生 河野 木香)

今回の体験は、自分の学生ボランティアとしての立ち位置について考え直す機会となった。本校の先生方が様々な仕事をこなされている中、自分もその一端になりたいと動いていた。そのあまり、自覚がないまま学生ボランティアの本分を超えた行いや注意をしたことがあった。「主役は子どもたち」、「学生ボランティアは先生ではない」という考えが身につけていなかった。改めてこの2点を念頭に置き、これからの支援活動に取り組みたい。

(英語教育専修3回生 福西 隆生)

## 【近畿ESDコンソーシアム・学生によるESD活動支援】

### あすかばんど野外活動支援 活動報告書

英語教育専修2回生 苗代 昇妥

1. 実施日 2022年9月3日(土)

2. 場所 奈良市青少年野外活動センター

3. 参加者 音楽教育専修4回生 佐藤 ころろ 教育学専修4回生 岩城 雄大  
特別支援教育専修3回生 西田 優佳里 国語教育専修3回生 川田 大登  
社会科教育専修2回生 山平 楓 英語教育専修2回生 苗代 昇妥  
幼年教育専修1回生 田中 花璃

#### 4. 活動の概要

「あすかばんど」とは、奈良市立飛鳥小学校の児童が中心となって、音楽活動を行うグループである。今回は、活動を活性化させる取り組みの一つとして野外活動が行われ、その支援を行った。参加者は、約30名であった。

レクリエーションやキャンプファイヤーを行う予定であったが、悪天候のため屋外でのキャンプファイヤーは中止され、屋内でペットボトルライトを行った。具体的な支援内容は、レクリエーションの際の補助や、ペットボトルライトでのスタントの実施である。

#### 5. 参加学生の学び・感想

私は、野外活動支援を通して、2つのことを学んだ。

一つ目は、判断をすることの大切さである。キャンプファイヤーを直前まで準備したのだが、悪天候のため取り止め、室内でペットボトルライトにより行うことにした。それを判断した主催者の対応により、全員が楽しく活動に取り組むことができた。

二つ目は、大人がお手本になることの大切さである。キャンプファイヤーやレクリエーションをする際、私たち学生や保護者が楽しむことで、場が盛り上がり、子どもたちを含めた参加者全員に一体感が生まれると感じた。また、危険を伴う活動においても、きちんと大人がお手本を見せることや安全に配慮することで、子どもたちが楽しんで活動を行うことができると考える。

自分自身の振る舞い方に気をつけ、より良い活動ができるように、今後も学んでいきたい。

(音楽教育専修4回生 佐藤 ころろ)

私が、今回の支援を通して学んだことは、状況判断に応じたプログラム変更の重要性である。

今回は、キャンプファイヤーの点火の直前に中止をするという判断が主催者によってなされた。私自身、開催可能ではないかと考えていたが、ひどい雷雨に見舞われたため、素晴らしい判断だったと感じた。プログラム通りに行うだけではなく、そのときの状況に応じて臨機応変に対応することも、私たち大人の役目であると感じた。また、そのときの判断に応じて対応できる態勢を整えておくことも大切だと感じた。

今回学んだことを様々な活動で生かし、状況に応じた判断を下せるようにしたい。

(教育学専修4回生 岩城 雄大)

私は、野外活動支援に参加し、大きく2つのことを学んだ。

一つ目は、事前準備と連携の大切さである。支援をしている際、天候を考慮しながら、次の活動について学生間や主催者と話し合っていたことで、急な変更に対応することができた。私たち学生は、事前に何度もキャンプファイヤーのリハーサルを行っていたため、臨機応変に対応することができ、安全に楽しく活動することができた。

二つ目は、個と集団に対する声かけの大切さである。今回の野外活動では、途中参加の子どもや、みんなの輪に入れない子どもがいた。全体を盛り上げる声を出すだけでなく、個々の様子を見ながら声をかけることで、最後には子どもたちの顔にも笑顔が浮かび、より良い活動になったと考える。

これらの学びを今後の活動に生かしていきたい。

(特別支援教育専修3回生 西田 有佳里)

私は初めて野外活動支援に参加して大きく2つのことを学んだ。

一つ目は野外活動における判断の大切さである。この日は天候が不安定であり、火をつける直前に大きな雷鳴がとどろいた。そこで、先生が中止することを判断したのだが、その後、激しい雷雨に襲われた。このことから、安全に活動を行う上で、不安に思ったら判断を躊躇わないことの大切さを感じた。

二つ目は自分自身が本気で盛り上がることの大切さである。私や周りの学生が声を張り上げてゲームをしたり掛け声をかけたりすることで、会場に一体感が生まれ、全員が盛り上がるスタuntsができた。よって、まずは自分が本気で盛り上がるのが大切だと思った。

これらの貴重な学びを今後の活動に生かしたい。

(国語教育専修3回生 川田 大登)

私は、今回が初めての野外活動支援であった。今回の支援を通して、大きく2つのことを学んだ。

一つ目は、キャンプファイヤーの手順である。今回の野外活動では、天候不良となり屋外でキャンプファイヤーはできなかった。しかし、薪の組み方などのキャンプファイヤーを行うまでの手順を詳しく学ぶことができた。

二つ目は、一人一人が楽しむ大切さである。私は、ゲームを行うことや子どもと関わることに不安な部分があった。しかし、子どもたちが笑顔で楽しそうにスタuntsに参加したり、レクリエーションをしたりしている姿を見て、元気や勇気ももらった。不安を感じていても、私自身がしっかりと盛り上げたり、楽しんだりすることで全体の雰囲気も良くなると感じた。

今回学んだことをこれからの活動に生かしていきたい。

(社会科教育専修2回生 山平 楓)

私は、今回の野外活動支援で大きく2つのことを学んだ。

一つ目は、状況判断の重要性だ。当日は天候が不安定で、キャンプファイヤーの際、点火の直前で中止と判断された。野外活動では、天候をはじめとした様々な要素を勘案しながら進めていくことや、安全を確保するための判断をすることの重要性を感じた。

二つ目は、スタuntsの際の一体感の大切さである。今回の活動には子どもたちや大学生だけではなく、子どもたちの保護者も参加していた。スタuntsの際、年齢関係なく全員が楽しみ、盛り上がっていたため、参加者たちが大いに楽しむことが出来ていたように感じる。その場にいる全員が楽しみ盛

り上がることで、一体感が生まれ、より良い活動となることが実感できた。

今回の学びを今後の活動に生かし、より良い活動支援を行えるように努力していきたい。

(英語教育専修2回生 苗代 昇妥)

私は、今回の野外活動支援で次の2つを学んだ。

一つ目は、場つなぎの大切さである。ゲームの始めや終わりに場を盛り上げるセリフを入れることで、ゲーム進行がスムーズになっていた。ゲームとゲームの間で、このようなセリフを入れることで参加者との会話が生まれると考える。そうすることで、場が盛り上がるだけでなく、キャンプファイヤー全体につながりができ、スムーズな進行を行うことができると実感した。

二つ目は、臨機応変に対応することの大切さである。当日は、主催者が屋外でのキャンプファイヤーを中止することで、のちの悪天候に巻き込まれずに済んだ。用意してきたことを遂行することに囚われずに、その場の情報をもとに判断し、行動することの重要性に気づくことができた。

これらの学びを今後を生かしていきたい。

(幼年教育専修1回生 田中 花璃)



**【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】**  
**奈良市立富雄公民館におけるワークショップ 活動報告書**

国語教育専修 3 回生 川田 大登

1. 実施日 2022 年 8 月 6 日（土）
2. 場所 奈良市立富雄公民館
3. 参加者 教育学専修 3 回生 木下 結等、1 回生 宮木 舞  
国語教育専修 3 回生 川田 大登、1 回生 飯田 朱音  
美術教育専修 1 回生 東 瑞

#### 4. 活動の概要

奈良市立富雄公民館において、「大学生とワークショップ！SDGs」というテーマの下、環境問題を取り扱った楽しく学べるワークショップを 90 分程度行った。小学 1 年生から 6 年生が対象であった。グループワークや劇、クイズを用いるなどして、参加者が楽しめる工夫を行った。

#### 5. 参加学生の学び・感想

本企画で、私は主にアイスブレイキングと子どもたちのグループワークの進行をさせていただいた。全体的に子どもたちのワークショップへの取り組みを円滑にすることが出来た。一方でアイスブレイキングでは子どもたちの反応が想定よりも弱かったため、進行や事前準備をもう少し十分に出来たらよりよいものになっていたと感じたので次回以降の反省点としたい。（教育学専修 3 回生 木下 結等）

本企画では、一から企画を考えさせていただいた。ワークショップのテーマは環境についてで、クイズや劇などを通して環境について考えてもらった。本番は少しトラブルもあったが、子どもたちの積極的な姿勢のおかげで小学生にとっても大学生にとっても有意義な時間となったと思う。

（教育学専修 3 回生 宮木 舞）

私は本企画の全体的な進行を行った。これを通して特に強く感じたことは教具の重要性である。本企画では、導入として、握り寿司を模した知育玩具を使用した。それを使う前に、アイスブレイキングを行ったのだが、年齢層が幅広いことや兄弟での参加が多かったこともあり、緊張が解け切っていない子どもが多かった。しかし、その教具を出して、ランダムに振り分けた 3 人程度のグループでテーマについて考えさせると、夢中で考えてくれ、企画の進行がスムーズになった。これを含めて今回学んだことを今後の企画や活動に生かしたい。（国語教育専修 3 回生 川田 大登）

寿司の知育玩具を用いたことで、寿司のネタがなくなる原因が地球温暖化であることをより実感でき、地球温暖化を身近な問題であることを認識できていたと感じた。また未来を見据えて、一人ひとりが地球温暖化にどのように関係し、解決方法としてクイズや寸劇の場で主体的に考え、児童の指摘と気づきを表現する態度を見ることができよかった。（国語教育専修 1 回生 飯田 朱音）

本企画は、SDGs 目標 13 番の「気候変動に具体的な対策を」に焦点を当てながら、劇やクイズを交えることによって、子どもたちの当事者意識を育むものであった。企画では子どもたちの主体性を垣間見ることができ、達成感のあるイベントになった。一方で、小学生に対する言葉選びへの配慮がいささか不十分な部分があった。この反省を生かし次の機会に活かしたいと思う。

（美術教育専修 1 回生 東 瑞）

## 【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動支援】

### イオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップ 活動報告書

国語教育専修 1 回生 吉岡 優来

1. 実施日 2022 年 9 月 24 日（土）10：30～17：00

2. 場所 イオンモール奈良登美ヶ丘 3F ならとみコート

3. 参加者 音楽教育専修 4 回生 佐藤 ころろ  
教育学専修 3 回生 木下 結等  
国語教育専修 3 回生 川田 大登、1 回生 田中 愛花、吉岡 優来  
特別支援教育専修 3 回生 山本 留維、1 回生 神吉 優利奈  
英語教育専修 2 回生 苗代 昇妥

#### 4. 活動の概要

イオンモール奈良登美ヶ丘において、「大学生に学ぶ SDGs ～木に親しむ～」というテーマの下、春日山原始林の木や鳥、鹿を取り扱った楽しく学べるワークショップを 60 分程度行った。小学 1 年生から 6 年生が対象であった。参加者に、アंकロンの演奏で活動自体に興味を持ってもらい、ワークショップの中で奈良の春日山原始林・鳥・鹿・人間と植物と動物の共生についての学びを促しながら、バードコール製作や鹿の折り紙製作を行い、取り扱ったことについて親しみを持てるように工夫を行った。

#### 5. 参加学生の学び・感想

私は、出前授業を通して、発達段階に合わせた声かけの重要性を学んだ。今回の出前授業には、未就学児から小学校 6 年生という幅広い年齢の子どもたちが参加した。バードコール製作や折り紙で鹿を折る際、特に未就学児や小学校低学年の児童は、活動に参加できなかつたり、理解が追いついていなかったりと様々な様子が見られた。そこで、どのように参加を促すか、分かりやすい説明は何か、試行錯誤しながら声かけを行った。このことにより、子ども達が楽しく活動に参加する様子が見られた。発達段階によって、理解に差があることを実感したと共に、それに合わせた声かけを行うことが子ども達の理解につながるということが分かった。今回学んだことを、これからは生かしていきたい。

（音楽教育専修 4 回生 佐藤 ころろ）

今回、初めてショッピングモールで出前授業を行い、その楽しさと難しさを感じた。授業では、バードコールの製作と鹿の折り紙という工作の時間が中心であったが、参加してくれた子どもたちがそれらを楽しんでくれていて、良かったと思う。授業で学生から伝える時間は短かったが、目標である木に親しむきっかけを作ることができたであろう。一方で小学校低学年や未就学児の子どもが多かつたり、その一方で高学年の子どもがいたり、参加する時間がバラバラだつたりして、ショッピングモールにおける出前授業ならではの難しさを感じた。

（国語教育専修 3 回生 川田 大登）

今回の出前授業では、ショッピングモールにてバードコール工作、鹿の折り紙教室、春日山原始林の自然環境についてのワークショップを行った。私は、直接的に子ども関わる機会が少なかつたが、前で



折り紙の説明しているときに一生懸命聞こうとしている子どもたちの姿勢に感動した。また、大学生も子どもと真摯に向き合っており個人の成長段階や精神的発達を加味した支援で良いものだった。集客も難しいところはあったものの、チラシやポスターを用いて積極的に声かけを行うことで多くの参加者を募ることが出来た。保護者からぜひ小学校にも来てほしいという声もあった。機会があれば、小学校での出前授業もやってみたい。

(国語教育専修1回生 田中 愛花)

今回のイオンモールでの出前授業では、バードコール製作と折り紙を通して、春日山原始林の鳥、鹿に親しむことを目的とした授業であった。参加者は小学生を想定していたが、未就学児や保護者の方も多く参加していただいた。私はバードコールや折り紙の製作の手助けをした。低学年や未就学児の子どもに対応することが多かったので、分かりやすい言葉で折り方を説明することの難しさや、製作をただで終わらないように声かけをすることの大切さを学んだ。また、難しい工程があったとしても自力でしようとしていたり、バードコールを「明日使う!」と言っていた子どももおり楽しみながら奈良の自然にも親しんでもらえてよかったと思う。

(国語教育専修1回生 吉岡優来)

今回は春日山原始林や鳥、鹿を取り扱った。小学生が対象だったが保護者との参加が条件だったため低学年の児童が多く、就学前の子どももいた。開催地が奈良公園から遠かったため、想定通り子ども達は鹿や春日山原始林のことをよく知らなかった。資料として写真をたくさん用意していたことは良かった点であった。また企画の中で2回製作活動を行ったが、説明したことと製作物にきちんとつながりがあったため子どもたちは「作ること」以外にも楽しみを見出していた。大学生は、自分なりに考えて子どもと接していて全体としては上手くいったと思う。ただ、お手拭きやテープなどを当日慌てて用意したので、次はリハーサルを入念にしたい。

(特別支援教育専修3回生 山本留維)

今回の出前授業は、森と動物、人の関わり方をテーマとした授業で、授業の中の活動としてバードコール工作と鹿の折り紙を行った。私は、出前授業を行う中で子どもの得手不得手や興味関心によって活動への積極性が違うことを学ぶことが出来た。折り紙が大好きな子どもは、説明を聞くだけで楽しそうに折っていたが、折り紙を苦手を感じる子どもはあまり笑顔が見られなかった場面もあったからだ。また、このように子どもの積極性が違うことから、声かけが大切だと実感できた。声かけによって苦手な子どもでもコツを伝えたら上手にできて喜んでくれたし、元々上手な子どもでもまわりの人の声かけを聞いて自身をつけ、物事への関心が高まると思った。

(特別支援教育専修1回生 神吉 優利奈)

今回の出前授業を通して学んだことは、参加者一人ひとりに合わせて関わり方を変えることの重要性である。今回の出前授業には小学校高学年から未就学児まで幅広い年代に参加して頂くことができた。同時に様々な子どもたちと関わる事ができるという貴重な経験ができた。その一方で、学生が行う授業や一人ひとりへの声かけに工夫が必要であることを学んだ。参加者によって得意なことが違っているので、年代や興味に応じて関わり方を変えていくことで学びが大きい出前授業になることを感じた。

(英語教育専修2回生 苗代 昇妥)

## 【近畿 ESD コンソーシアム・学生による ESD 活動書】

### 奈良市立都跡小学校野外活動支援 活動報告書

英語教育専修 2回生 苗代 昇妥

1. 実施日 2022年9月23日(水)

2. 場所 奈良市青少年野外活動センター

3. 参加者 音楽教育専修 4回生 佐藤 ころろ 幼年教育専修 4回生 井原 奈佑  
英語教育専修 2回生 苗代 昇妥 特別支援教育専修 1回生 才田 優佳

#### 4. 活動の概要

2022年9月23日に奈良市青少年野外活動センターにて、奈良市立都跡小学校5年生の野外活動が行われ、その支援を目的として本学ユネスコクラブの学生が参加した。活動支援の具体的な内容は、オリエンテーリングと野外炊飯の補助、キャンプファイヤーの準備、スタンプの実施などである。



キャンプファイヤーの様子

#### 5. 参加学生の学び・感想

私は、野外活動支援を通して、次の2つのことを学んだ。

一つ目は、連携を取ることの大切さだ。オリエンテーリングや野外炊飯、キャンプファイヤーの各活動において、変更点が多々あった。しかし、密に連携を取ることで、想定外のことでも協力しながら適切に対応することができた。

二つ目は、適切に状況判断し対応することの重要性だ。キャンプファイヤーの際、予想以上に火が強かった。火の粉などで児童が怪我しないようにするための対応や、キャンプファイヤーの薪が倒れてしまったときの対応を話し合った。臨機応変に対応できたことで、安全に楽しくキャンプファイヤーを行うことができた。

私は、安全に活動するためには、適切な状況判断と密な連携が必要だと実感した。この学びを今後の活動に生かしていきたい。

(音楽教育専修 4回生 佐藤 ころろ)

私は、野外活動支援を通して、次の2つを学んだ。

一つ目は、ファイヤーキーパーの方法だ。私は、キャンプファイヤーでファイヤーキーパーを行ったが、ファイヤーキーパーは初めての経験だった。キャンプファイヤーの火の勢いが予想以上に強く、難しい状況だったが、火の様子とスタンプの進行状況を考慮しながら臨機応変に火の管理をすることができた。

二つ目は、雰囲気作りの重要性についてだ。キャンプファイヤーの進行中に場を盛り上げる声掛けをすることで、本気でキャンプファイヤーに取り組むことを「楽しい」と思える雰囲気作りができたと感じる。このような雰囲気作りを行うことで、子どもたちの団結力を高めることができ、キャンプファイ

ヤーを大いに盛り上げることができた。

今回の活動で学んだことをこれからに活かしていきたい。

(幼年教育専修 4回生 井原 奈佑)

私は、今回の野外活動支援を通して、次の2つのことを学んだ。

一つ目は、臨機応変に対応することの重要性である。今回の野外活動では、予定の変更が多くあった。その度に、周りとの連携を取りながら、対応したことで安全に活動を進めることができた。児童にとって有意義な活動を安全に行ってもらうためには、事前準備と臨機応変な対応の二つが欠かせないと分かった。

二つ目は、スタンプの際に、率先して声掛けをする大切さである。スタンプの最中に、場を盛り上げるための声掛けをするかどうかによって、児童の声の大きさや盛り上がりには大きな差があった。自らが率先して声掛けをすることで、全体の盛り上がりが大きく変化することが分かった。

今回の活動を通して学んだことを、今後に活かしていきたい。

(英語教育専修 2回生 苗代 昇妥)

今回の野外活動支援を通して私が学んだことは、野外活動が児童に与える影響の大きさだ。私は、今回の野外活動支援は何度も参加させていただくなかの一回だと考えていた。しかし、児童にとっては一生に一度の思い出であり、一人ひとりの心に残り続けることを改めて感じた。このことを念頭に置いて、児童のことを第一に考えながら今後の活動に参加したい。また、野外活動は児童の思い出に残るだけではなく、仲間と協力したり、打ち解けたりできる意義深い活動だと分かった。

この学びを今後の活動に活かしていきたい。

(特別支援教育専修 1回生 才田 優佳)



## ESD・SDGsセンター キックオフイベント

### ◆ 概要

①SDGs が目指す世界～持続可能な社会と人間の安全保障～

②SDGs と教育：持続可能な社会と人間の安全保障

### ◆ 自分で考えたこと

今回のキックオフイベントを通して私が印象に残っていることは3つある。

一つ目は、SDGs の 17 の目標を達成したら終わりではないということだ。17 の目標の先に「誰も取り残さない」というゴールがあったことを今回の講演で初めて知った。この「誰も取り残さない」という言葉がとても素敵だなと感じたのと同時に、自分が行動しないと 17 の目標を達成することも、誰も取り残さないというゴールを達成することもできないのだと強く思った。問題解決のために誰がどこでどう取り残されているのかというシートを作成しているのを見せていただき、このようなシート作成を行うことでその土地の問題などが見えてくるのがよく分かった。自分が教員となったときに、子どもたちとともに総合の授業などで、市民にアンケートを取ったりすることでより問題理解が進み、解決策も見えてきやすいのではないかと思ったので、実践していきたい。

二つ目は、ジェンダーについての話である。アフリカなどでは女性への残酷な風習が今でも続いていたことを今回のパワーポイントの情報を調べてみて初めて知った。このような風習が知られていないことも問題の一つであると感じた。そして理系の女子が少ないということもジェンダー問題の一つであることに驚いた。これはジェンダーと聞いて私が思い出したことなのだが、山口大学の工学部では女性優遇制度を入試でとっている。理系分野で活躍できる女性を育成する場を設けることはすごく良いことだと思うし、女性目線の商品開発なども増えてくるのではないかと考えた。しかし、違う視点から見ると男子への差別であるともいえる。ジェンダー問題の複雑さを改めて考えさせられた。

三つ目は、日本人の主観的評価が低いということである。日本人は謙虚がゆえに自己肯定感が低いという話を聞く。お話にもあったが、教育現場から変えていくのはとても良い案だと思った。小学校などでは、帰りの会などで隣の人のいいところを三つ見つけるなどのルールを設定したり、みんなと違う意見を一人一個言うことを行ったりしたいと考えた。子どもたち同士で認め合い、自分の良さや強みを見つけ、人と違う個性がとても良いことであると気づけるような学級づくりを行っていきたい。

(国語教育専修 1 回生 山下 絢捺)



#### ◆ 概要

- ・SDGs が目指す目標について

世界規模から地域社会(市町村別など)までとても幅広い視点で指標別に確認し、日本の子供の精神的幸福度や都道府県別といった指数も算出していた。最後は実践例と奈良市の取り組みを紹介して、持続可能な社会を実現するためにというテーマで対談が行われた。

#### ◆ 自分で考えたこと

私はSDGsについて内容や意味をあまり深く考える機会がなかったので今回の講演を聞いて新たな学びが多くあった。なかでも驚いたことがSDGs指標の限界だ。定められている指標に関してあまり疑問を持ったことがなかったが、今回の講演を聞くと確かに日本の場合、達成に近い目標があり国ごとに差があることを感じた。私は「6. 安全な水とトイレを世界中に」について日本では達成されているので関係のない目標だと感じていた。今日の講話で達成に近い目標はその目標をもとにして自分たちに合った目標を認識しなければならないと話されていた。このような話からSDGsの目標には柔軟な視点が必要だと感じた。また、都道府県別の人間安全保障指標に関してもバラツキがあり驚いた。奈良県の場合は女性の雇用率が低いことが挙げられていた。気仙沼のリターンの実践例で就労支援を行う取り組みが紹介されていた。奈良県でも南部(奈良市でも東部地域)は過疎化が深刻化している。女性に限らず人手が不足(技術後継者)している状況なのでこのような支援策が早急に必要であると感じた。

(心理学専修3回生 木村 直希)

#### ◆ 自分で考えたこと

持続可能な社会の担い手を育成することが学習指導要領にも明記されるようになり、ESDの重要性が高まっていくなか、このキックオフイベントを通して、私たち自身が次世代のESDの担い手だと意識させられた。特に、国連大使をされていた高須先生からの講演は非常に有意義なものであり、「個人が変革の主体」という言葉や、「SDGsが最終目標じゃない」といった言葉は非常に印象に残っている。私自身、SDGsこそが目標で、これを達成すれば良いと考えていた部分があった。しかし、高須先生の講演で、社会をよりよくするためのゴールはないのだと考えるようになった。奈良教育大学だから、ユネスコクラブだからこそできる、ESDの学びを深めていきたいと思う。そして、ESD-SDGsについて今は学ばなければならないことが多く、うまく実践する段階までできないが、大学生活の中でたくさん経験していこうと思った。

(英語教育専修1回生 澤井 咲樹)

## アースディ奈良 2022 におけるボランティア

### ◆ 概要

奈良公園において、「2030 年のゴールまであと 8 年～サステナブルを奈良から発信する～」をテーマに行われた。開催日は地球の日に合わせて行われるため、世界各国で環境や平和について考えらえるイベントの 1 つである。展示やワークショップ、飲食、物販など多様な参加ブースがあり、様々な現代が抱える問題について触れることができた。

### ◆ 自分で考えたこと

本イベントに参加し、環境や人権問題に対する自分の行動を振り返ることができた。毎日何気なく生活する中にも、本イベントで問題提起されていた課題が多く存在している。

例えば、プラスチック容器の使用だ。衛生面や使いやすさから、プラスチック容器をよく使用する。だが、本当に全ての場面においてプラスチック容器を使用する必要があるのかと考えると、そうではないだろう。飲食ブースで、マイ食器かリユース食器の使用か選択できるようになっていた。洗うという手間があるとは思いますが、ゴミゼロの達成にはもってこいだと考えた。ゴミが増えることで、捨てるという手間もゴミ袋の用意も必要となるため、マイ食器やリユース食器は良いアイデアだと思った。実際、食器の使用に関して問題はなく滞りなく進んでいた。そこから、私はマイ食器やリユース食器の使用も時代と共に使用に対する意識も変化していくのではないかと考える。まずは環境について考える、次に考えるだけで留まらないよう行動に移していくことの重要性を痛感した。

(社会科教育専修 3 回生 北野 結衣)

### ◆ 自分で考えたこと

私は今回このイベントに参加して得たことが 2 つある。

一つ目はイベントを開催することは計り知れないほどの時間と人手が必要で、注意を払わなければならないということや、数知れない問題点をすべて把握し解決していかなければならないということだ。だがその分、多くの人と役割分担をし、全員が最善を尽くすことで大きな力が生まれ、イベントを成功させることができるということも学んだ。このイベントは一年間もの月日を通し企画・準備を行った。私が携わったのはイベント直前の数週間前からという短い期間だったが、それでも、いかにイベントを運営することが大切であるかを知った。

二つ目は、人前に立って話すスキルだ。私は人前に立って話をするという経験があまりなく、正直得意ではなかったが、信頼のできる上回生の方のサポートもあり、初めて大きなイベントの司会を務めることができた。イベントが始まる以前は、人前に立って話をするということが、計り知れないほど難しく、どう話せばよいか何に気を付けたらいいのか全く分からない、緊張でガチガチだという印象を強く持っていた。しかし、このイベントの司会を通して、事前にたくさんの方と打ち合わせを重ね、事前準備をしっかり行い、練習すれば過剰に不安を感じることなくスムーズに仕事をこなすことができると学んだ。教員を目指す者として、非常に貴重な経験をすることができた。また多くの人と力を合わせ、イベントを成功させることはとても楽しく、有意義な時間を過ごすことができた。

(書道教育専修 2 回生 栗垣 実咲)

## イオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップ

国語教育専修1回生 吉岡 優来

### ◆ 概要

イオンモール奈良登美ヶ丘において、「大学生に学ぶ SDGs ～木に親しむ～」というテーマのもと、春日山原始林の木や鳥、鹿を取り扱った楽しく学べるワークショップを60分程度行った。小学1年生から6年生が対象であったが、未就学児や保護者も多数参加していた。参加者に、アンクロンの演奏で活動自体に興味を持ってもらい、ワークショップの中で奈良の春日山原始林・鳥・鹿・人間と植物と動物の共生についての学びを促しながら、バードコール製作や鹿の折り紙製作を行い、取り扱ったことについて親しみを持てるように工夫を行った。

### ◆ 自分で考えたこと

今回のイオンモールでの出前授業は、バードコール製作と折り紙を通して、春日山原始林の鳥、鹿に親しむことを目的とした授業であった。参加者は小学生を想定していたが、未就学児や保護者の方も多く参加していただいた。私はバードコールや折り紙の製作の手助けを行った。低学年や未就学児の子どもの対応をすることが多かったので、分かりやすい言葉で折り方を説明することの難しさや、製作をただで終わらないように声かけをすることの大切さを学んだ。初めは緊張して教えることに必死になっていたが、回数を重ねるごとに子どもの様子を見ながら言葉を選び、「楽しんでもらう」ということを念頭に工夫していくことができた。子どもに何かを教えたいとき、教える側自身が余裕をもって楽しみながら接することで、子ども自身もより興味を持つことになり、より効果的に実施できると考えた。

ESDの観点からは、難しい工程があったとしても自力でしようとして、バードコールを「明日使う！」と言っていた子どももお楽しみながら奈良の自然にも親しんでもらうことができた。活動をしたときにSDGsについて何もわからない年齢であっても、将来、このような活動を通して、SDGsを知らず知らずのうちにしていたということが分かったとき、身近なことを自分事化する意識などがより高まりやすくなるのではないかと考えた。

### ◆ 自分で発展させたいこと

今回、特に子どもたちへの接し方を学んだため、これからの実習などで生かしていきたい。また、子どもにやる気をださすための声のかけ方などについてもこれから学んでいきたい。

## 外国人留学生懇談会におけるアングロン演奏

### ◆ 概要

外国人留学生懇談会において、アングロンで「ふるさと」を演奏した。

### ◆ 自分で考えたこと

アングロンという楽器は、今回が初めて知った。インドネシアの楽器を使って、日本の伝統的な曲「ふるさと」を演奏することに最初は驚きを感じた。だが、いざやってみると、みんな協力しないと演奏できないため一生懸命に練習した。そして、最初にあった驚きよりも、成功させたいと言う気持ちでいっぱいになった。ほとんど当日のみの練習だったので、不安だったが、当日のみの練習で、あれだけ成功させたのは本当に凄いと思う。そして、この経験で本番に自信がついた。失敗が一回もなく、最高の状態で発表出来たことを嬉しく感じた。

演奏が終わったあとには、留学生と少し交流することができた。短い時間ではあったが、留学生と話すことが出来て嬉しかった。留学生の日本語の上手さに驚いた。自分も留学してみたいと、より思うようになった。そのために、日常の学習から頑張っていこうと考えた。このように、自分の意欲を高めてくれた懇談会に参加出来たことに非常に感謝している。

(特別支援教育専修1回生 才田 優佳)

### ◆ 概要

留学生懇親会の出し物の一つとして、インドネシアの楽器であるアングロンを用いてふるさとの演奏を行った。この楽器は、ひとつひとつが一音に対応しており、片手で杵を持ちもう片方で対象の杵を揺らすことで筒が揺れて音が鳴る。

ちなみにこの活動はいつもの定番だそうで、今回は学長さんも参加して下さいました。練習はその日に殆ど行ったが、それまでの準備にも沢山の人が携わって下さった。

### ◆ 自分で考えたこと

綺麗に鳴らすのも一苦勞で、なかなかうまくいかない場合もあった。正しい持ち方をしたとしても、音によっては綺麗に鳴らない時もあり、何度か試行錯誤している様子が伺えた。私も初めは横で揺らしていたが、最終的に縦にすることで本番はよく鳴っていると感じた。また、一人一音である為に、皆で連帯しているという意識を持つことが出来た。楽器演奏は一人で出来るものがあるのに対して、今回は複数人でタイミングなどを合わせる必要がある。音という見えないもので繋がりを意識できたと考えている。

(英語教育専修3回生 前田 桃香)



## 附属幼稚園の東大寺遠足引率支援

美術教育専修 1 回生 東 瑞

### ◆ 概要

11 月 2 日に本学の附属幼稚園で催された東大寺遠足に遠足支援として参加した。遠足の流れは元奈良国立博物館学芸部長の西山厚さんから東大寺の魅力についてのご講演を賜ったのちに、東大寺へと足を運び仏像や建築の鑑賞を経て解散するという流れだった。遠足支援としての仕事は幼稚園から東大寺の移動の補助であった。

今回の遠足を通して、「子供のなんで？にあえて答えない教育」と「親子で楽しめる授業づくり」について興味を持った。二つとも、ゲストティーチャーの西山さんの講演から想起したものである。西山さんの講演の特徴として、子供たちが発した質問にすぐ答えず、考える時間を作ること、子どもから大人まで悩める問いを複数設ける工夫がみられた。授業に気持ちがこもっていなければ子どもたちの思考力・判断力を育むことはできない。

今回、西山さんの講演と子どもたちや親御さんの反応から「子供のなんで？にあえて答えない教育」と「親子で楽しめる授業づくり」を取り入れた教育を展開していきたいと思った。

### ◆ 自分で考えたこと

今回、西山さんの講演から親子で一緒に SDGs を楽しく学べる機会を設けたいと思った。子供たちは学校の授業や地域の子供向けの催しなどで SDGs を学ぶが、多くの親御さんは SDGs に触れる機会がなく、無関心なまま人生を歩むことになる。しかし、SDGs への関心を高めることは、非常に重要である。「地球が今悲鳴をあげている、口に運ぶ一粒の米さえもないアフリカの子どもたちがそこにいる。我々はその行行って何かしてやれとは言わないが、ただ関心を持ち、心を通わせてほしい。状況を知ってこのままではだめだと感じて欲しい。」そういう気持ちを私は持っている。親子で楽しく地球の現状を学ぶことができれば、きっと行動の変革を促すことができると思う。



## 東大寺寺子屋

### ◆ 概要

今回の東大寺寺子屋は、子どもたちに「なぜ大仏様は大きいのか？」という疑問を持たせて、お坊さんからお話を聞いたり、東大寺の大仏様を実際に見学したりすることによって自分なりの答えを導き出そうとする企画である。

まず始めに、お経の意味を学びながら練習した。その後、おにぎりの法話を聞いて、昼食をとり、東大寺を周り、さまざまなお話を聞いた。そして、グループごとにディスカッションを行い、「なぜ大仏様は大きいのか？」という問いに対する答えを班ごとに出した。

### ◆ 自分で考えたこと

私が最も感じたことは、子どもたちは一人一人違った、さまざまな意見を持っているということである。お坊さんからのお話や法話など、子どもたちは同じことを聞いて学んだが、そこから得られる考えは違ったものになったという点がとても興味深いと思った。また、一人ひとり異なった考えを持つことによってグループディスカッションがより充実したものになったと思った。他の人の意見を聞き、自分がどのように感じたのか、どのように自分の考えを言葉にして伝えたら良いのか、子どもたちは試行錯誤しながら頑張っていた。そのようなときに、答えを言うのではなく、答えに自力でたどり着けるようにどのようにサポートするのが重要だと考えた。

私は子どもと接する機会を今まであまり持つことがなかったため、今回の寺子屋の企画に参加して、子どもたちの多様性やサポートの仕方など学ぶことができたと思った。寺子屋のなかで、自分の考えをなかなか言葉にできない子や話し出すと止まらない子など、さまざまな子どもと接した。寺子屋が始まる時、どのように子どもたちに接すると良いかなど考えて本番に挑んだが、やはり実際の現場と想定していた内容は違うのだということを実感した。今回のような、実際に子どもたちと関わる企画に参加したことは、貴重な体験であり、私の教師についての考えに大きく影響を与えたように思う。

(特別支援教育専修1回生 若松 あさひ)



#### ◆ 自分で考えたこと

今回私はこの活動に参加した明確な理由はあまりなく、始めはなんとなくやってみようという興味本位の気持ちだった。しかし、10月の練習を兼ねた大仏殿参拝に参加したときに、大仏様のあまりの大きさと迫力に圧倒された。そういったこともあり、あまり大仏様に関する知識のない私ももっとその分野について詳しくなりたいと感じた。とはいっても、今回の「大仏さまはなぜ大きいのか？」というテーマはこれといった答えがないものだった。実際、本番当日のディスカッションでも言葉に詰まってしまう子どももいた。大仏殿へ参拝に行っているときは、あまりに大きい大仏様を前にして興奮した様子を示す子どもが多かったが、いざなぜ大きいのかを考えるととなると難しい様子だった。それでも一人ひとりが自分の感じたことや考えたことを自分なりに表現することができていた。

僧侶の方にもこのテーマに即したお話は多くしていただいたが、大仏様が大きいのは物理的な理由なのか、精神的な理由なのか、それ以外なのかなど、子どもによって意見の方向性が様々だった。さらに子ども一人ひとりの性格には、自分の意見に自信を持って言える子、良いことを書けているが人前で意見を言うのが苦手な子などがおり、子どもたちから、うまく意見を引き出すことは非常に難しいことなのだと思感じた。私も10月の事前学習の際にこのテーマについて自分なりの意見を持つことができたが、今回の活動で子どもたちの意見を聞くと、自分には思いつかなかった斬新なアイデアが多く見付き、驚きと同時に、新たな視点を手に入れることができた気がした。答えがないからこそ自分なりの考えを持つことや、他者との交流を行い、自分の視点を増やしていくことは歴史以外のどの分野の学びにとっても大切なことである。特に今回は、子どもたちの視点の多様さを数多く感じることができた。子どもたちの意見を引き出して、広げていけるようなスキルをこれからも身に付けて、自分自身多くのことを吸収できるよう努力していきたい。

#### ◆ 自分で発展させたいこと

合計二回の東大寺寺子屋での活動や僧侶の方々のお話を通して、東大寺について詳しくなることができ、答えのない問題を考えることの大切さを知った。しかし、新たな考え方を得るためには自分一人で完結するのではなく、他者と意見を交流することも不可欠であると分かった。多様な性格を持つ子どもやそれ以外の人々とうまくコミュニケーションをとるためにはどうすればよいのか、これからの日常生活や実践を通して、探究してみたいと感じた。

(特別支援教育専修1回生 中津川 奈々弥)



## 奈良市立西大寺北小学校 野外活動支援

英語教育専修1回生 澤井 咲樹

### ◆ 概要

10月5日に西大寺北小学校の野外活動支援を行った。場所は奈良市青少年野外活動センターだ。8時25分に西大寺北小学校に行き、そこからバスで野外活動センターに移動した。到着するとすぐに、入所式を行った。その後、オリエンテーリングに参加し、ポイント地点に立ち、そこに来た子どもたちの挨拶が10点満点中何点なのかを点数を付けた。その後、子どもたちと昼食をとった。午後からは、伐採体験に参加した。子どもたちがヒノキの間伐体験をして、丸太切り体験のお手伝いを行った。そして、野外炊飯の準備を行った。鍋やコップを人数分出したり、子どもたちの炊飯のサポートをしたりした。作ったカレーを食べた後は、先生方や子どもたちと後片付けをし、キャンプファイヤーの準備をした。キャンプファイヤーではスタンプを2つ行い、子どもたちのスタンプにも参加した。

### ◆ 自分で考えたこと

最初に行った「キャンプだホイ」は、子どもたちが振り付けをあまり理解できていない様子だったので、もう少し説明が必要だったのではないかと感じた。歌って踊るので、盛り上がっていて、私たちの声も届いていたと思うので、その点は良かったと思う。一方で、5回ほど繰り返したので、話す声に疲れが見え始めて、子どもたちにそういう空気を伝えてしまったのではないかとも思う。

次に行った、「ぞうさんありさん」は私が主となって行ったので緊張したが、非常に盛り上がっていたので良かった。しかし、盛り上がりすぎて、次の台詞を言いたいのに、聞いてくれないという場面があった。そういう状況になったときに、どのようにすれば児童は注目してくれるのかを考えなければいけないと思った。

そして、キャンプファイヤーでの私の行動を振り返ってみると、周りを見て、児童一人ひとりに声かけを行わないといけなのにもかかわらず、円の同じところにとどまってしまう、積極的な声かけができていなかったのではないかと思う。一緒になって楽しむのも大切だと思うが、私たちはあくまでも児童がキャンプファイヤーを楽しむためのサポートをすることが目的だということを忘れてはいけないと感じた。

今回が初めての野外活動支援だったが、精一杯行うことができたと思う。同時に、反省点もたくさんあるので、次同じ機会があれば、反省点を活かして行動できるようにしたいと考える。



## 奈良市立済美小学校 野外活動支援

### ◆ 概要

済美小学校5年生のキャンプファイヤーの支援を行った。練習から本番まで学ぶことが多くあった。

練習ではスタント自体の流れだけでなく、周りの子どもの反応も予想しながらの構想することの難しさを学んだ。当日には、子どもたちが騒いでしまった時にどう対応したら良いのか、上手く参加出来ていない子どもが参加しやすくなるにはどうしたら良いのか等、実際に行ったからこそ分かる学びがあった。

### ◆ 自分で考えたこと

小学生の子どもたちの動きは予想の出来ないこともあったことから、その年齢の子どもと普段から接して、適切な接し方ができるようにしたいと思った。また、子どもが騒いでしまったときに、落ち着かせるための声掛けを子どもと接しながら考えていきたいと思った。単純に落ち着かせようとする、子どものテンションまで下がってしまうと思うので言い方に配慮したいと思う。

上手く参加できていない子どももいたことから、キャンプファイヤーのスタント・ゲームでは皆が楽しめるものを選んだり、参加しやすいように方法を考えたりするなどの工夫を考えたいと思った。

次回参加する時は今回の学びを活かして、より子どもに楽しんで貰えるような野外活動支援を行いたいと思った。

(特別支援教育専修1回生 神吉 優利奈)

### ◆ 概要

済美小学校に野外活動支援として、キャンプファイヤーでの支援を行った。当日は雨が降ってしまったため、キャンドルを用いた室内での実施でした。ユネスコクラブとしては四つのスタントを実施したが、私はそのうち一つのスタントの中心メンバーとして参加した。

### ◆ 自分で考えたこと

今回、私は初めて本格的に子供たちと関わる機会であったため、子どもたちとどう接すればよいのか分からず、手探りの状態だった。そのなかで、子どもが主体的に動けるような声掛けなどを考えているべきであるのに、出来ていなかったと振り返って思う。次回以降は、今回の反省点を生かし、子供たちが主体的に動けるような声かけ等をしていくべきであるし、それを学ぼうと考えた。

また、さまざまなことをESDに繋げることが出来ると感じたため、ESDの学習を取り入れつつ、子供たちが楽しんでもらえる活動づくりを心掛けたいと考えた。

(社会科教育専修1回生 横井 琴音)

## 陸前高田市文化遺産調査団

社会科教育専修1回生 木幡 美幸

### ◆ 概要

2022年9月7日から10日まで岩手県陸前高田市でESDと減災について学んだ。1日目は、東日本大震災津波伝承館、奇跡の一本松、タピック45、気仙中学校、陸前高田ユースホテルに行った。また、陸前高田市教育委員会に表敬訪問をした。2日目は、陸前高田市立博物館の副主幹、前市民協働部長の佐藤由也さんによる講話(陸前高田市の復興状況と地域のコミュニティづくりについて)、オープンしていない陸前高田市立博物館の見学、陸前高田市立図書館館長菅野義則さんによる講話(防災教育と復興教育について)3日目は、陸前高田市仮設博物館での被災資料の復元状況について見学、講話 旧吉田家住宅復旧状況見学 陸前高田市立博物館の地震についてのコーナー再見学、広田町の石碑見学を行った。4日目は、藤里沙門堂、豊田館跡想定地、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、中尊寺、毛越寺見学である。

### ◆ 自分で考えたこと

#### 1日目

考えたことは二つある。

一つ目は、防潮堤を築き海が見えなくなることは本当に町にとっていいことなのかということだ。もちろん、津波を防ぐことができるから安心、甚大な被害をもたらした海が見えない方が心穏やかに過ごせるという人もいるかもしれない。人と防災未来センターの上映作品の中で「人はいつしか自然と共に生きることを忘れたのかもしれない」というセリフがあった。防潮堤によって海が見えないことは海という自然と共に生きることを忘れ、人々の減災意識の低下に繋がるのではないだろうかと考えた。(防潮堤があると潮の音が聞こえないと気が付いた方が防災班のなかにいた。海の姿が見えない、潮の音が聞こえないことは海を感じられる生活を送ることができないのではないだろうか。)

二つ目は、防潮堤や、かさ上げは悪い面だけではないということだ。

事前に陸前高田市のことをインターネットで調べた時、「陸前高田 復興失敗」、「陸前高田 かさ上げ無駄」などというマイナスな検索結果が出てきた。実際に色々な記事を読んできたが、かさ上げや防潮堤を肯定的に捉える記事を見つけることができなかった。

伝承館の方にお話を伺ったところ、防潮堤は津波を防ぎ、防ぎきれなかったとしても時間稼ぎになる。また、かさ上げも津波が人々の近くに届くまでの避難するための時間稼ぎになるとおっしゃっていた。そのような見方をする記事を見つけられなかったし、そのように自分は事前学習のときに捉えることができなかったのも、なるほどと思うことができた。物事は見る面が異なると、プラスにもマイナスにも捉えることができるので難しいと改めて実感した。かさ上げしたが人々が戻ってきておらず町はさみしい景色のように感じた。

## 2 日目

防潮堤によって海が見えなくても良いということを考えた。

昨日は海が見えないことはあまり良くないのではないかと考えた。しかし、菅野さんにこのことをお聞きしたところ、「命が一番大切 娯楽として海水浴に陸前高田に来て海が見えないのは良くないかもしれないが、このような娯楽と生活は異なる。安全を確保して自然と生きることが大切なのではないか」という主旨のことをおっしゃっていた。確かに、命が一番大切だ。また、陸前高田市東日本大震災検証報告書で、震災当日学校にいた子ども達が全員助かった要因として毎年必ず学校で避難訓練を実施していたからことが挙げられていた。震災後、防潮堤が築かれ、海は見えなくなったが、震災前と同じように避難訓練をきちんとしていれば自然と共に生きることを忘れずに地域の中で暮らしていけるのではないだろうかと考えが変わった。

また、実際に見たり聞いたりすることは大切だと考えた。私は東日本大震災で大変な思いを経験したことはない。だから、東日本大震災を被災した人と同じように感じて、自分事として考えることには限界がある。私は、被災した地域を見たり、被災した方のお話を聞いたりすると、できるだけ自分事として捉えることができると思う。そのように考えるためには五感を使って何か感じ取り考えることが必要である。

## 3 日目

考えたことは、被災した資料を修復して、残して、次世代に繋いでいくことは持続可能な地域社会をつくっていくうえで大切なことだということだ。

仮設博物館で「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」という紙が貼っていた。たくさん建物や人が被災したのだから文化財等も被災しているはずだが、私は今まで東日本大震災と文化財とを結び付けたことがなかった。その紙を見て、資料の復元に携わっている方々の復元にかかる使命感のような熱意を感じて胸を打たれた。復元されるということは次世代へ繋ぐ価値があるということで、地域の歴史が繋がっていくという側面もあると考えた。復元しても、その価値を次世代が認識することができなければ次の世代には繋がらない。次へと繋いでいくために、教育の面からアプローチができるのではないかと考えた。例えば、授業で地域のものを紹介したら良いのではないかと考えた。

## 4 日目

初めて平泉を訪れて、奥州藤原氏について学ぶことができた。

中尊寺では、初めて仏像に圧倒された。あんなに大きな大仏がある奈良県で育ったのにこのような感覚は初めてだった。また、金色堂も昔の職人さんが作ったもので、こんなにも現代人を圧倒させる綺麗なものを作ることができるのかと感動した。感動するということは昔の人が美しいと感じる価値観と現代人の価値観とが通じ合っているということであり、不思議な感覚だった。前日に山岸先生がおっしゃっていたが、現在の情勢と昔の蝦夷地との関係を意識しながら色々な場所を巡った。地域と時代が違っても同じようなことを人間が繰り返して何物も変わっていないと思った。何も変わっていないのはよくないことだと思った。なので、これから教員になるうえで、教育の現場から世界を変えていくために ESD を学んでいきたいと思った。

## 令和4年度 県内大学生が創る奈良の未来事業の継続事業

国語教育専修1回生 田中 愛花

### ◆ 概要

附属小学校の社会見学に同行したり、東吉野小学校の社会見学の作成、実践を行ったりした。また、東吉野小学校で3年生と4年生が合同で社会見学に行った。

### ◆ 自分で考えたこと

附属小学校や東吉野小学校の先生方、川上村の職員さんと会議を行った。附属小学校の児童たちと共に川上村に社会見学に行ったとき、初めは小学生と話ができるか不安だったが、附属小学校の児童が積極的であったため馴染むことができた。ゲストティーチャーの方の話を児童が理解しやすいよう先生がヒントを出したり、あらかじめ先生が児童に学んでほしいことを頭に入れておき、そこにつながる発問をしたりと工夫されていた。私も真似したいと思った。

この後、東吉野小学校の社会見学の指導案を作った。平城宮跡、ならまち、東吉野の3つの指導案を作成した。作るなかで、学習指導要領に基づいて計画を立てており、一回生の私はついていくことに必死だった。東吉野の先生と相談の結果、私が携わっていたならまちで、社会見学を行うことが決まった。事前指導が1時間、社会見学が4時間、事後指導が2時間だった。私は事後指導の計画を立てることになった。社会見学班と足並みを揃えながら計画を立てた。ここでも、自分の力不足をひしひしと感じた。何度も会議を行ったが、なかなか決まらないことも多くあった。社会見学当日になり、私は2つあるうちの1つの班を担当したが、東吉野の児童と大学生との温度差があり非常に戸惑った。社会見学の内容とそこで学んでほしいことを十分に共有できていなかったことや、私自身が児童との関わり方がまだ分かっていなかったため、もう1つの班に比べ児童の学びが浅くなってしまった。事後指導は、机間指導を中心に行った。昼休みに児童たちと共に遊んだことで仲が深まり、午後から非常にスムーズ進めることが出来た。アイスブレイクが重要だということもわかった。附属小との交流もうまく終わり安堵したが、十分な学びを提供できなかったことにとっても落ち込んだ。

1回生にして、貴重な体験をさせていただいたことにとっても感謝しているが、自分の力不足や不甲斐なさを感じた。企画途中では、辛いことも多かったが、児童が楽しかった、やってよかった、もっと話したかったと言ってくれたので疲れが全部吹き飛んだ。来年度以降も頑張ることを決意した。



## あつまれ ECO キッズ！

### ◆ 概要

ユネスコクラブブース準備の手伝い、JICA 関西ブース運営の補助、紙飛行機とぼし大会の運営・司会を主に行った。

### ◆ 自分で考えたこと

今回の ESD 実践では特に子どもたちとの接し方について学んだ。私に関わった子どもたちの多くは小学校低学年や幼児だった。視線を同じ高さにすることを意識した。さらに、分かりやすい言葉やジェスチャーを使うようにした。初めは緊張しているようだったが、最後には子どもたち側から話しかけてくれるようになった。ここ数年はマスクを着用することが当たり前になり、表情を読み取ってコミュニケーションを行う機会が少ない。そのため、表情だけでなく、プラスの言葉、身振り手振りで褒めたり、指導したりすることがこれまで以上に重要になっていると考えた。一方で、紙飛行機とぼし大会に関わった子どもたちは元気で活発な子が多かった。指示が一回で通らなかつたり、自由奔放に紙飛行機を飛ばしたりする子もいた。そういった場合には言葉にメリハリをつけて、何度も注意を促すことが大切であり、教える立場の方が子どもたちの勢いに流されないようにすることが大切だと実感した。「優しいお兄さん・お姉さん」であることも悪いことではないが、紙飛行機とぼし大会のような様々な人が集まって活動するような場では、指揮を取って全体をまとめる立場であることを忘れてはならないと思う。教育現場でもメリハリのある教育が大切だと感じた活動だった。

(社会科教育専修 2 回生 山平 楓)

### ◆ 自分で考えたこと

フードバンク奈良さんの取り組みは、SDGs の 17 の目標のうち「1. 貧困をなくそう」と「2. 飢餓をゼロに」に関連していたように思う。各家庭や企業から提供された食品は、子ども食堂や社会福祉施設に提供されているそうだ。家庭で余ってしまった食品を無駄にすることなく、困っている人のために役立てようとする取り組みに感銘を受けた。与える方も与えられる方も幸せを感じることができており、良い循環が生まれていた。

KUBERU さんの取り組みは「15. 陸の豊かさを守ろう」に関連していたと考える。また、企業で行っている取り組みについてお話を伺うことができた。林業と障がい者の方の就労支援を結び付けているそうだ。林業で環境を守るだけでなく、森林を通して人と人との心を繋げられることに衝撃を受けた。さらに、KUBERU さん所属の方は、新潟から駆け付けたそうだ。住んでいる場所に関係なく、SDGs に貢献してくれる人がいることを実感できた。誰かのために行動しようとする人がいるからこそ、SDGs は受け継がれてきているのだと思う。

今回の活動を通して、SDGs への取り組み方だけでなく、人との関わりの大切さを学んだ。大学の同回生や上回生の方やそれぞれのブースの方に優しく接していただき、非常に有意義な時間を過ごすことができた。私も関わる人に温かい気持ちをもって接し、誰一人として取り残さない社会づくりに貢献していきたい。

(国語教育専修 1 回生 佐藤 蓮美)

#### ◆ 概要

- ・フードバンク：セーフティネットとして活動する団体
- ・「もったいない」を「ありがとう」に
- ・目に見えない声にも耳を傾け、食べ物を通じて必要な支援へとつなげる

#### ◆ 自分で考えたこと

今回初めて、ECO キッズに参加した。私は、午前に KUBERU さん、午後にフードバンク奈良さんの仕事をお手伝いさせていただいた。そのなかで、特に印象に残ったのはフードバンク奈良さんの仕事のお手伝いだ。

フードバンク奈良さんは、食品製造企業からの在庫品をはじめ、自治体や様々な企業の災害備蓄品のほか、一般のご家庭の未利用食品、学校や職場、自治体などのフードドライブ品などをお預かりし、必要としている子ども食堂やシングルマザーの家、社会福祉施設などに提供している法人である。その法人の”「もったいない」を「ありがとう」に”というスローガンが心に残った。買ってしまったけれども使わないものや、もらったけれどもいらぬものうち、賞味期限が1ヶ月以上あるものはフードバンク奈良に持っていくと、困っている人がとても助かると思う。捨てることは環境に良くないが、行動を1つ変えると環境にもよくなり人も喜ぶことにつながる。しかし、実際には認知度が低く私が話しかけた人のほとんどが知らなかった。知っていた人でも、名前は聞いたことがあるが実際には何をしているかわからないとおっしゃっていた。説明すると、良い取り組みだと気づいてもらえ、協力していただけそうな人ばかりであった。さらに認知度を増やすことで、環境にも良く、困っている方たちの生活が良くなるのではないかと思った。また、持って行く場所の少なさを指摘された方もいた。奈良には2カ所しかなく、週に3回活動している場所は、西大寺にしかないということについて指摘をされていた。町のスーパーなどがあると、簡単に持って行くことができ、協力しやすいとおっしゃっていた。そこには人件費や土地代なども関わっており、簡単にはいかないと思うが、そのようなことが実現するとさらに持って行きやすく、認知度も広がり商品が増えると考えた。その当日には2人の方が持ってきてくださり6品ほど集まった。どこの家庭にもある、「食べられるがいらぬもの」を持ち寄ればさらに多い量になると思う。

フードバンクを普段見ることは私もあまりないが、少しでも周りに広め自分も協力することが大切なのではないかと感じた。一人でも多くの方がこの取り組みを知り協力して欲しいと強く思う。

(書道教育専修1回生 杉村 若葉)

## 2022年度 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践発表会

### ◆ 概要

【日時】2022年12月25日・26日

【内容】2022年度 近畿 ESD コンソーシアム成果発表会・実践交流会

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校でESDの理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標（SDGs）への関心が企業やNPOなどの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育及び企業等においても質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、またESDの普及を目的に開催された。近畿のユネスコスクールに通う子どもたちの発表や、全国各地でESDやSDGsに関わる教員、企業や行政で活動する方の成果や実践の発表があった。

（特別支援教育専修3回生 西田 有佳里）

### ◆ 自分で考えたこと

ESD対談シンポジウムでは、ESDの認知度が教員の間で差があることが課題になっていると知ったことがとても印象強く残っている。教員の間でも認知の差があるのだろうと考えていたが、その要因の一つがESDとの親和性の高い教科を担当していれば自然と知る機会が訪れる一方で、そのような教科でなければ、知る機会がないからだと知った。現在、ESDとの親和性が高いと言われていない教科でもESDと結びつけられるような力を付けたいと思った。

（特別支援教育専修1回生 神吉 優利奈）

子どもフォーラムでは、ユネスコの活動について真剣に交流して、子どもたちが取り組んできた姿に刺激を受けた。自分たちができることをその子たちなりの方法で実現に向かって全力で取り組んでいた。また、子どもフォーラムの後に「また奈教のユネスコクラブさんとも交流したい」という言葉を頂いた。子どもフォーラムでの出会いがこれからの活動に繋がる可能性が広がった瞬間で、大変嬉しかった。これから、より一層ユネスコスクールとの交流を増やしていきたい。

実践交流会では、ESDを実践されている現場の先生方や環境省の方のお話を聞くことができた。自然を守ろうとするけれど、自然はなぜ大切なのかという前提を持てているのか、子どもたちの安全管理について自分たち自身で考えて危機管理できるようになっているかなど、私にとって新しい視点を得ることが出来た。また、自分事化とは「自分の言葉で表現し伝えること」ではないかというお話があり、印象的だった。平和について自分たちの言葉で感想を書き、子どもたちの感想を共有する活動をしていた。この活動は子どもたちが自分事化することに繋がると話されていた。自分事化するために必要なことを学ぶことができたので、私のESDの指導案にも活かしていきたい。

（教育学専修3回生 中家 麻弥）

◆ 概要

春日山原始林に存在する植物や生物、多様性などに関する課題や問題を知った。

また、森の中を歩くことで自然を体感し、春日山原始林の過去と現在の様子を結びつけながら観察できた。

◆ 自分で考えたこと

今回のフィールドワークでは、春日山原始林やその周辺の生態系に着目しながら活動を行った。何年もの月日を経て今も成長し続けるもの、生きてはいないが存在感は残したままのもの、やわらかいもの、かたいもの、太いもの、細いものなど様々だった。動物に関してはシカに加え、シーボルトミミズやマムシ、姿は見えなかったがムササビなどがいた。

春日山原始林の生態系は多様で現在も良好な自然環境に思えるかもしれない。しかし、説明を聞いていくとそうではないということが分かった。まず大きな問題の一つとしては、これから森林を作っていく木々やそのほかの植物が減り、表土があらわになってきているということだ。主な理由は自然災害と野生動物にあった。森林は近年の度重なる豪雨や台風、それによる土砂災害の影響を受けたり、シカがカシやシイなどの幼木をはじめとする特定の植物だけを食べたりするため、そういった植物が成長して生きづらい環境になっていた。こういった原因から春日山原始林の植物が減り、表土が流れ出していた。

もう一つの問題は、外来種が入り込み森の様子が変わってきているということだ。特に椰子が印象的だった。この木はシカが好んで食べる種ではないので森林内でも多く存在していた。しかし問題なのはこの種が外来種であるが天然記念物でもあるということだ。外来種が生息範囲を広げることは春日山原始林の生態系のバランスを崩すことにもつながってしまう。だが、天然記念物に指定されているため、むやみやたらに切ることもできない。生態系のバランスか天然記念物かどちらを優先して考えるべきかとても難しい問題だと思った。こういった問題も対策はされていた。植物がシカに食べられないよう籠のようなもので守ったり、ネットの策で囲ったりと人々の工夫が見られた。

私は今回のフィールドワークでは驚くことが多かった。上述したように、多様性で良好な環境に見える春日山原始林にも大きな問題があった。日本の世界遺産、特別天然記念物である春日山原始林をこれからも持続可能なものにしていくためには、我々人間が自然環境を保護していかなければならないのだと実感した。木の伐採に許可が必要であることなども、普通の森林で考えたら厳しいことだと思えたが、この森林を守っていくためには必要な約束だと思う。なにより、現在春日山原始林で暮らしている様々な生物がこの先も平和に生活していくために、我々はこの生態系を維持していく義務があると感じる。春日山原始林の環境を保全することは天然記念物だからというだけでなく、人間以外の生命の命を守るためにも怠ってはならないものなのだと私は考える。

◆ 概要

春日山原始林に行き、体全体を使ってたくさんの自然に触れた。息を深く吸うと、澄んだ空気とともに雨のにおい・植物のにおいも同時に感じられる。耳に手をあてて周囲の音を聞いてみると、水が流れる音や風の音をはっきりと聞こえてくる。木や葉っぱを触ると、様々な感触を味わうことができた。このように五感を研ぎ澄ませることで、自然の神秘というものを実際に体感した。今回の活動を通して植物は生きているということを改めて知らされた。

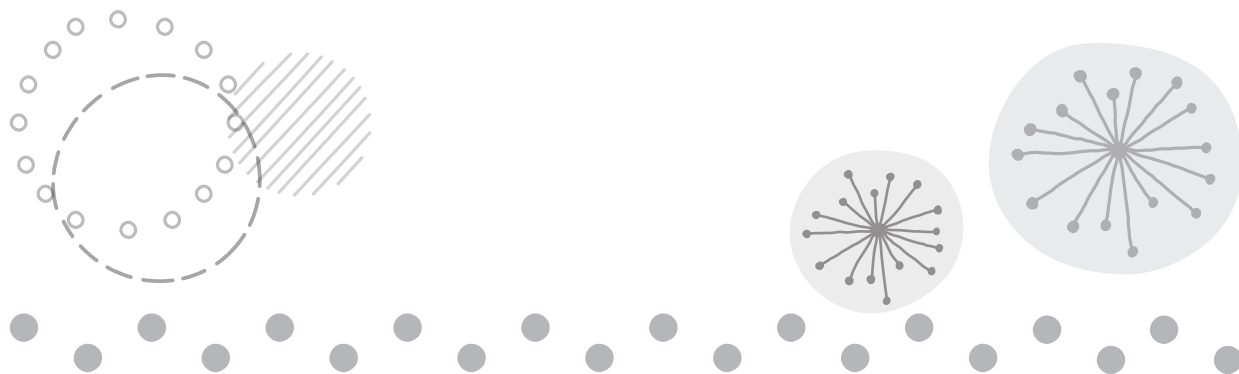
また、初めて見た昆虫や植物にたくさん出会った。まずルリセンチコガネという虫は、鹿の糞を食べる生き物である。地域によっても色が違うので、地域ごとに楽しめるだろうと考えた。植物ではナギやイチイガシが印象に残っている。ナギは針葉樹で神木とされており、葉が切れにくいため縁が切れにくいと言われている。ナギは鹿が食べないので、奈良公園にはナギが溢れている。イチイガシは常緑広葉樹で色々なことに使うことができる。そのため、頻繁に伐採されてしまい数が少なくなっている。ほかにも、ムラサキシキブ、ヤブムラサキなどがあった。

◆ 自分で考えたこと

植物がたくさんあったが、それを鹿が食べてしまい、次の世代がいなくなってしまうという事態が発生していることを学んだ。フェンスを張るなどの対策を取ることによって、鹿に食べられてしまったところからも新たな生命が芽吹いていることが分かった。これは奈良だからこそその問題であり、鹿がいなければこのような問題は起きなかつただろう。しかし鹿がいるからこそ奈良であり、植物が食べられてしまうからといって排除するわけにもいかない。生命のバランスというのは非常に難しいと感じた。

また、外来種が原始林にもあるということも学んだ。予想以上にあちこちに外来種が存在していた。一見すると綺麗で全く害のなさそうな植物でも、実際は在来種に多大な影響を及ぼしていた。私たちがほかの植物を持ち込まないのはもちろんのことだが、意図せず入り込んでしまうこともあるため、その都度環境を保全する必要があると思う。

自然豊かな環境を守っていくためには、一人でも多くの方が、自然は有限であるということ意識しなければならないと考える。



◆ 概要

奈良公園、東大寺境内、二月堂境内、春日山原始林のフィールドワークを通しシカや外来種の問題、建造物の鑑賞を通した歴史、固有の環境問題などを学んだ。

◆ 自分で考えたこと

集合場所の奈良公園では昔の景観を取り戻そうというコンセプトから松が植樹されていた。しかし、生息環境に適応することができず枯れてしまう松の姿も目立っていた。東大寺南大門では、金剛力士像の荘厳さに圧倒されつつも門の柱には観光客がはめ込んだ小銭がみられ歴史遺産の保護の必要性を実感した。

二月堂境内の鐘楼は釘が一切使われていない伝統技法で建設されており、長きにわたり巨大な鐘を木材だけで支えてきたということが分かった。春日山入山コースの折り返し地点の鶯の滝でライトを消し自然の音に耳をそばだてた。普段の生活ではスマホや町の雑音に気を取られて、自然が奏でる優しい音に気づくことができなかつた。フィールドワークを通して自然の旋律や地元の魅力そして新たな環境問題について知り、それを考える良いきっかけが得られた。これからも春日山フィールドワークに参加し自然の危機に機敏に反応できるソマティックマーカーを養っていきたいと思った。

◆ 概要

奈良公園の樹木と自然遊び

◆ 自分で考えたこと

目を閉じて自然の音を聞いたり、色々な特徴の葉っぱを見つけてきて葉っぱじゃんけんをしたり、小学校の授業でも実践できそうな自然遊びを体験した。目を閉じて自然の音を聞くと、葉っぱが1枚ずつ落ちる「ヒラヒラ」という音や落ちた時の「パサッ」という音、様々な鳥の鳴き声など普段を聞こえない音を聞くことができた。聴覚を研ぎ澄ませることでこんなにも自然の中には音があったのかと驚きと感動を覚え、聞いたことないような不思議な音ばかりで面白かつた。葉っぱじゃんけんは、自分のお気に入りの葉っぱを見つけてきて出たお題に合う葉っぱを出し合って競う遊びだ。フィールドワーク後に子どもと関わるボランティアの自由時間で葉っぱじゃんけんを実践した。すると、子どもが楽しそうに取り組んでいた。子どもと楽しめる遊びを知ることができて良かつた。

## 第一回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座

### ◆ 概要

教育における ESD の位置づけを学んだ。持続可能な社会のための学びに、自分と社会を変えることを学ぶという立体的な視点が付け加えられた。

### ◆ 自分で考えたこと

ESD は他教科の付け足しだと思っていた。自分の興味関心と SDGs が結びつきそうであったため今回の講座を受けたが、ESD に対する印象が変わった。ESD を目指すことで、社会は持続可能に近づき、自分の視野も広がる。学校教育においてモラトリアム期が延長され、社会人としてのイメージが持ちにくくなった現代のことを考えても、社会的課題に真剣に取り組める ESD が当たり前である世の中に価値を感じた。そのように思い至った後で SDGs のゴールを見つめ直したとき、ひとつ気にかかったことがある。それは、人の心に関する視点が弱いことだ。絶対的貧困が少ないものの自殺者が多い日本において、人の心のケアができる環境をつくることは重要なはずである。その観点を欠いているところに疑問を持った。もしかすると、心理という対人的な視点は、社会的視点から物事を見る SDGs のものの見方からは外れているのかもしれない。あるいは、数値化しにくいために目標に設定するのは見送ったのかもしれない。どのような理由であれども、心という視点まで含めて初めて持続可能な社会が成り立つと私は考える。

(幼年教育専修 1 回生 田中 花璃)

### ◆ 自分で考えたこと

今回の連続公開講座では、及川先生の「ESD も SDGs も流行ではない。ずっと変わらないものである。」という言葉はすごく印象に残っている。ESD は他の教育と違って社会を創るための目標を持った教育で、様々な問題に対してそれらを自分自身のこととして捉え、新たな価値観や行動の変容をもたらすものだ。そして ESD は、教科横断的にどの角度からもアプローチでき、すべての教科を牽引していくものである。それぞれの教科の良さや特徴を生かしながら誰も置き去りにしない授業を展開していきたいと思った。また、私自身が防災教育に興味があり、気候変動や自然災害についての授業をしたいと強く思った。災害列島である日本に生きているからこそ過去の災害の記録などを活用してできる授業があるのではないかと考える。南海トラフ地震に対しても、今後必ず起きると言われていても、どこか他人事のように感じている人が多いのではないかと思う。理科、社会、総合的な学習の時間など様々な教科の知識を用いながら私たちにできることは何かを考えていくことが今私たちに必要なことなのではないだろうか。「教員の最大の責務は子どもたちの幸せな生活を守ることである。」と講義のなかで仰っていたように、これから生きていく子どもたちに私たちは何を残していけるのか、何を伝えていけるのかを考えながら私自身も学んでいかなければならないと今回の講義を通して強く感じた。

(書道教育専修 1 回生 神余 友唯)

## 第二回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座

社会科教育専修1回生 木幡 美幸

### ◆ 概要

愛媛大学教育学部 教育臨床講座 准教授 藤原一弘先生

「チャンスを活かす Teacher' s Life ~ESD どの出会いとこれから~」

### ◆ 自分で考えたこと

藤原先生のお話から考えたことは、こだわりがある教員にならなければならないのではないかと考えた。

私になりたいと考えている、高校教員は将来無くなる職業であると聞いたことがある。倫理観等を教えるために、小学校、中学校教員は必要だが、高校は大学受験のための勉強なので AI でよいという理由であったと思う。確かに、小学生・中学生に比べ、高校生は倫理観が出来上がっているかもしれないが、決して成熟しきったものではない。また、高校での学習はすべて大学受験のためではない。高校生は今後の人生についても考え始める段階だと思う。そんなときに、親以外の大人の一例として多種多様な個性を持った高校教員がいることで人生を知ることができる。高校教員にはそのような役割もあるのではないかと思う。その個性は、その人のこれは譲れないという意味からくるこだわりから生まれるのではないかと考える。私は、AI は何かこだわりを持って行動することはできないと思う。人間ならではの自分の意志があることで生まれる、こだわりを持って教育に携わることで、AI ではなく人間が教育を行うことの価値があるように思える。そして、私はこだわりを持った教員にならなければならないと考え、これからの学校生活のなかで、こだわりたいことを見つけたいと思った。

### ◆ 自分で発展させたいこと

自分で発展させたいことは、自分の中にぶれない信念を見つけることだ。大学での授業を通して、自分が教員になった時にやりたい、もっと調べてみたいと思うものにいくつか出会えたが、どれが一番やりたいか自分の中で整理しきれないからだ。今回、防災減災教育、ESD、無着先生の綴方教育について改めて考えてみると、全て自分の生活に繋がっている教育であるのではないかと考えた。防災減災の知識は今後、自分を守ること、また他者を守ることに繋がる。ESD において、持続可能な社会を創ることは自分の生活が持続可能になることと繋がっている。無着先生の綴方教育は自分の実生活を丁寧に見つめることで実生活と教科書に載っていること、社会問題が繋がっていることを気づかせるための教育ではないかと考えた。

私はこの三つのような教育を行い、学校での勉強は実生活に繋がっていることを理屈で理解し、今後の生活に活かすために学校での勉強があると生徒に感じてもらえるような授業を行うことが信念となるのかもしれない。しかし、私は他人からいい意味でも悪い意味でも引っ張られやすい性格なので、卒業するまでにぶれない信念を見つけようと思う。



### 第三回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座

特別支援教育専修 1 回生 中津川 奈々弥

#### ◆ 概要

第3回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座では、奈良市立朱雀小学校の中村先生にご講演いただいた。タイトルは「教師生活を enjoy する秘訣」である。

#### ◆ 自分で考えたこと

今回の講演ではコロナ禍やデジタル化などのまさに今の時代における学校現場、教員としての役割や仕事などに着目した内容のお話を聞くことができた。

私たちが高校生になって少ししたころから流行り始めたコロナウイルスが人々の暮らしを一変させたのと同時に、学校における教員の働き方も大きく変えていた。教員が教壇に立って子どもたちに授業をするという当たり前とも思えるような光景が、コロナによって密を避けるために学校を休校とし、オンライン授業を実施し始めた学校も多い。コロナ前は、児童と対面し授業をすることで得られた教員側の教師としてのスキルもあっただろうし、授業外での交流で得られた発見もあっただろう。分からないことがあれば同僚や先輩に相談することで解決できたかもしれない。しかし、パソコンやスマホの利用によって、以前までは学校で行っていた仕事も今では自分の家で行えるようになり、他者と関わる機会も減ってしまった。こういった教員の現状に私は少し不安になってしまった。大学だけでは得られない学びがあるはずなのに、そういった学びの場が奪われてしまっていることは、インターネットなどの便利さの裏に潜む教員への弊害でもあるのではないだろうかと感じる。コロナ禍の現在では、オンライン授業や成績入力など、インターネットが大きな役割を果たしているのも事実である。しかし、その使い方を間違えてしまうと失ってしまうものの方が大きくなってしまいかもしれない。そこで、子どもたちが安心して学校生活を送り、学んでいくためには教員としての力量が不可欠だ。人任せにせず、常に当事者意識を持ち、周りへのアンテナを張る。こういった意識を当たり前を持つことができれば変わりゆく時代にも対応でき、得られるスキルの幅も広がっていくのではないだろうか。

私はこの話を聞く前まで新人の教員がこういった形で成長していくのか具体的には分からなかった。しかし今回、このようなリアルな学校現場の話を聞くことができたということを最大限利用して、残りの大学生活、そして実際の教育現場に出たときに生かすことができるよう意識して生活していきたいと感じた。

## 第四回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座

### ◆ 概要

井阪先生のご講演「梅干しづくり」「和服の文化を学ぶ」

- ・授業は教師も楽しいものでありたい。授業は教科書を教えるもの？  
→授業は教科書を使って教えるものであり、既存のコンテンツを教えるものではない。探求させる活動が大切。
- ・ESDは教育の目的であり、目標ではない。目標はSDGsである。→目的を達成するために、目標がある。
- ・目的=方向性…1人1人のイメージが異なるため、パフォーマンス課題から評価する。
- ・価値観の違いはあって当然→教師の価値観を児童生徒に強要してはいけない。

### ◆ 自分で考えたこと

教科書に書いていることはすべて正しいと思っていたが、教科書に対しても疑いの目を向けることで視野が広がっていくと感じた。教科書に文化を伝承しましょうと書かれているため、私は昔の文化は素晴らしいと思い込んでいたが、講義を聞いて必ずしもそうではないと感じた。和服の文化が素晴らしいのであれば、今でも和服を日常着にすればいいが、そうしない理由がある。伝承したいと自身が思い、伝承していくことで良さが伝わっていくのだと考える。そのためにも、価値を押し付けるのではなく、生徒自身に気づかせることが大切なのだと感じた。

(家庭科教育専修3回生 宇和谷 紗恵)

### ◆ 自分で考えたこと

前期のESDと学校教育でも井阪先生の家庭科でのESD実践を聴かせて頂き、今回も実践についてお話を聞いた際に本当に先生の実践はおもしろく興味をひく部分が多彩に盛り込まれており、ESDという観点だけではなく授業としてのおもしろさも改めて感じられた。連続セミナーに参加し構想案を作った際に、少し授業としては堅いかもと言ってくださったこともあり、授業を作る際には、ESDやSDGsの視点だけではなく、子どもたちの興味を引くといった部分も重要だと感じた。梅の実践では、井阪先生ひとりだけではなく、郷土料理でお世話になったおばさま方・栄養士など様々な人と関わり合って作られたものであるという話を聞き、授業者は一人かもしれないがたくさんの人と関わって授業を作ることで、学級だけで完結しない授業づくりが行えるのだと感じた。それにより、子どもたちの視点も広げられているのではないかと感じた。

最後に先生が「自分自身の身近な大切なことから気付いて広げていく」とおっしゃられているのを聞き、「身近なことやもの」から学ぶことで生活の中でESDの視点が育まれていくのではないかと感じた。もっと、井阪先生のこれからやっていきたいと思われる実践なども聞いてみたいと思う。

(音楽教育専修3回生 森 恵里奈)

## 第五回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座

社会科教育専修1回生 木幡 美幸

### ◆ 概要

第5回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座「手島流 SDGs の授業に参加しよう～主体的・対話的で深い学びにつながる教科横断的な学びの創り方～」 手島 利夫 氏

### ◆ 自分で考えたこと

学んだことは、生徒に教師によって、学ばされている感を感じさせてはいけないということだ。講座のなかで、学ばされている感を感じ、学びは深まらなかったという意見の大学生が紹介された。私も似たような経験をしたことがある。教員になった時、自分のような生徒を生み出さないためには、生徒の学びに火をつけることが大切だと講座を通して学んだ。考察したことは、生徒を授業に巻き込むことと巻き込む授業にはどのような要素があるかということについてだ。

生徒の学びに火をつけるためには、生徒を授業に巻き込むことが大切だと考える。私は、社会科で大変面白く時間が経つが早い授業をしてくださった先生がきっかけで教員を志した。自身の経験から、面白く時間が経つのが早い授業とは、授業内容について「答えは〇〇か？いや違うな、えっ、それが答えなの先生!？」などと生徒の頭がフル回転している状態だと思う。また、生徒の学びに「火をつける」ことを生徒側から見ると「火をつけられた」状態であると考え。加えて、生徒の頭が教員からの働きかけでフル回転している状態は、教員によって生徒が授業いわば教員の世界に巻き込まれ、一部となっているような状態でもあると考える。一方、生徒が主体的になれない授業は、生徒が授業で取り扱っている内容に対し、他人事、義務感を感じていると思う。

手島先生の授業の生徒を巻き込む工夫のなかで、私が気づいたのは3つだった。一つ目は、語りかけながら授業をすることだ。手島先生の授業は、語りかけるような言葉が多かったと思う。語りかけるような語調は、授業内容がより自分達と近いように感じられる。自身の学校生活を振り返っても、眠くならない授業の先生は、語りかけや問いかけが多かった。二つ目は、教員が授業を楽しそうにすることだ。教員が楽しそうだと、授業の受け手もつられて楽しくなってくる。私の恩師の先生も授業のコツとして、教員側がとにかく楽しそうに授業することとおっしゃっていた。三つ目は、動きのある活動を多く取り入れることだ。手島先生の授業では、近くの人との話し合い、教室全体での意見の共有、一つの課題に取り組むなどの、考えを持って参加する活動が多かった。このような活動は教員の問いに対して何かしらの答えを持たないといけなくなるため、教員によって授業に巻き込まれるといえると考え。座学だと興味のない生徒以外は受動的になり時間をやり過ごしていると授業は終わる。この悪い状態を解決するための手段として動きのある活動があると思う。動きのある活動であると、自分が理解しないと活動に参加できず、参加態度も能動的なものに近くなる。しかし、座学も基礎的な知識を身につけるために欠かせない。そのため、座学と動きのある活動を授業の中でどのように組み合わせていくかが重要になると考える。

## 第一回奈良教育大学 ESD・SDGs 連続オンラインセミナー

### ◆ 概要

初めになぜ SDGs があるのか、SDGs が出来た背景から始まり近畿唯一の海なし県である奈良県での海洋学習について話された。その後 SDGs の目的、SDGs が何を目指しているのかを SDGs が出来る前の MDGs と比較し、内容の違う部分や、SDGs がそのまま受け継いでいる内容などにも言及された。そして SDGs 自体の枠組み・特徴の話から ESD・SDGs の関係性についてのお話を聞きした後、ESD と SDGs についてグループワークを行った。

### ◆ 自分で考えたこと

奈良の周りには海がないため海に関する学習がおろそかになり、未来に綺麗な海を受け継ぐという考えが薄くなるため奈良でもしっかり海洋学習を行う必要があるというお話から、自分の身近な物だけでなく周りにない物も学習をしっかり行うことが、これからの未来のことを考えられる子どもを育てられるのではと感じた。さらに、ESD についての話し合いでは自分自身が小学校で地元学習を受けた記憶が残っていないため、話を聞く前は地元学習を行う意味をあまり感じられなかったのだが、グループワークや先生方の話を聞き、地元学習【特に地産地消や地元の歴史など】の重要性を改めて感じられた。私は音楽専門のため、音楽の授業の中に地元学習を入れていけるような授業を考えていきたい。

(音楽教育専修3回生 森 恵里奈)

### ◆ 概要

第1回は美に関することであった。文化遺産や地域に根ざした文化が衰退していくのを生徒に考えてもらうために美しいと感じることから始まり、これらは自分たちひいては世界に必要なものであると思ってもらえる授業やワークショップが提案された。

### ◆ 自分で考えたこと

芸術とは娯楽であり、生きていくうえで必ずしも必要なものではない。そしてみる人、体験する人に良かったといってもらえるものでないと長い時間受け継がれていくこともないだろう。ただ、昔からあるという理由だけではその芸術は廃れていってしまうだろう。例えば、歌舞伎は日本の伝統文化の一角を担うものであるが、若者に見てもらえず、ゆっくりと衰退していった。しかし、歌舞伎の演出にプロジェクションマッピングを用い、歌舞伎役者がテレビやメディアに出るようになり息を吹き返した。姿は少し変わってしまったが、文化を残すための選択であったのであろう。文化が姿を変えずに後世に残るにおいて、残す価値を知ってもらうことが重要であると考えた。

(美術教育専修1回生 福原 望愛)

## 第二回奈良教育大 ESD・SDGs 連続オンラインセミナー

音楽教育専修 3 回生 藤本 尋巳

### ◆ 概要

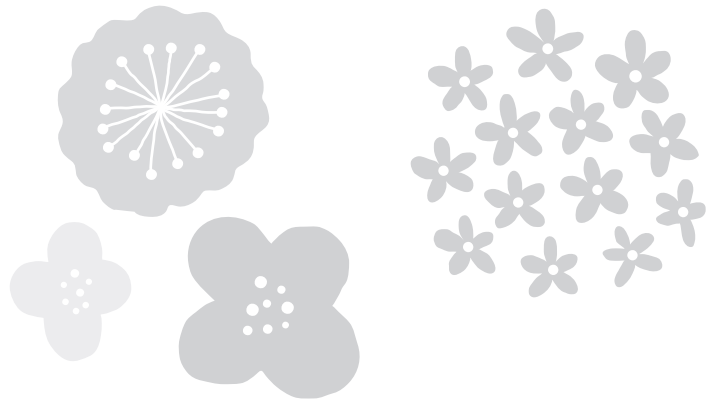
海洋問題について、内陸県に住む私たちも向き合っていかなければならないことや、日本の相対的貧困率が年々上がっており、子どもたちの 7 人に 1 人、さらに一人親では 2 人に 1 人が貧困状況であることを知った。

貧困(SDGs 目標 1)であると親の経済的要因などから教育格差(目標 4)が生まれる、その学習体験の喪失から低キャリアの人が増え(目標 8)、最終的には社会的格差(目標 10)に繋がっていくといったように負のスパイラルが生じる(カッコ内は関連する SDGs の目標)。

SDGs 未来都市として、また自治体 SDGs モデル事業となるような取り組みを発信することで、SDGs について積極的な姿勢を見せている地域・自治体がある一方で、まだ SDGs が浸透しておらず、学校や町全体といった規模で SDGs に関する大きな動きが広まっていない場所もまだまだ多く存在する。

### ◆ 自分で考えたこと

日本国内でも貧困問題やジェンダー格差、自然災害等、目の前に大きな課題をたくさん抱えている。そのなかでも、もっと女性が働きやすいような環境整備・制度の充実を進めることは、子どもの貧困を避けることにも繋がるのではないかと考えた。課題解決に向けてもっと国、自治体から SDGs に向けた取り組みを発信していく必要性を感じた。しかし、自分の育った地域・学校でも SDGs について大きなプロジェクトがあるわけでもなく、SDGs という単語も飛び交っていないのが現状である。大学生のうちに ESD・SDGs についてたくさん学び、教員になったときに学校という場を通して ESD の視点を子どもたちに身につけさせ、行動できるよう育てていきたいと改めて実感した。一人でも多くの人に SDGs についての知識を広めていくことが ESD ティーチャーを目指す私たちの使命であるとも感じた。



## 第一回 森と水の源流館授業作りセミナー

### ◆概要

森と水の源流館の方から、川上村について紹介いただいた。そこから”地域資源の教材化”のための授業実践のネタを考えた。例えば、川上村の人口減少を、伊勢湾台風の水災害の視点から考え、現代の水災害の被害やそれに取り組む人々に着目すること、そして、吉野林業が生物多様性に与える影響や、人々が自然に介入することの重要性などだ。特に、川上村は水資源が豊富で、水質もとてもきれいだ。しかし、コロナ禍でゴミが増え、川が汚染されている。このことから、川上村は住民の声をもとに「しないでください運動」を実施し、生物多様性を守ることに取り組んでいる。このように、いろいろな川上村の地域資源をもとに、ESD に活用できそうなネタと、実際にどのように行動に移せばよいかを考えた。

### ◆自分で考えたこと

森と水の源流館の方や現職の先生方のお話を聞いて、ESD は価値観や行動の変革を目指すもので、学校教育で何をすればいいのかを教えるだけではいけないのだと思った。教師が丁寧にわかりやすく教えるよりも、児童・生徒が体験することの方が何倍も意味があり、発問しながら授業を作ることが大切なのと感じた。そして、ESD の授業作りでは対象とする地域と自分の地域を比べて、空間軸や時間軸を広く捉えて取り組んでいけるように、私自身、まずは、ESD の授業実践のタネに気づける視点を持てるようになりたいと思う。

(英語教育専修 1 回生 澤井 咲樹)

### ◆自分で考えたこと

川上村は地域素材がとても良く、環境や自然をたくさん肌で感じることができる。水が豊富でとてもきれいというのが特徴だ。川上宣言によって川上村は守られているといっても良いだろう。このような川上村には、いくつかの問題点があることを学んだ。一つ目は人口減少と少子高齢化だ。昭和 34 年までは 8000 人ほどいた人口は平成 17 年には 1000 人近くまで減少しているグラフを見た。令和 3 年を調べると 1300 人と多少増加したものの、昭和と比較して大きく減少していることが分かった。また、小学生は 29 人、中学生は 13 人と少ないが、2020 年の高齢化率は 57.2% と半分を超えていた。川上村は山地のため斜面が多くなっている。高齢者にとって暮らすことが普通の土地よりも難しい。そのため、福祉を考えた道路や土地の整備を行いつつ、川上村の利点を宣伝することが大切だと考える。二つ目はゴミ問題だ。マナーの悪い観光客がバーベキューなどによってゴミを川辺に放置するといった行為があるそう。それによって、川の汚染も問題となっている。この問題についても真摯に向き合い取り組んでいかなければならない。

(社会科教育専修 2 回生 東 晃太郎)

## 第二回 森と水の源流館授業づくりセミナー

英語教育専修1回生 澤井 咲樹

### ◆ 概要

和歌山市雑賀小学校の赤松先生から総合の授業実践についてのお話を伺った。コロナ禍だからこそでできることを行っていて、コロナ禍を活かしていた。導入として森と水の源流館の尾上さんから頂いた水を用いて、ペットボトルのラベルに書いてある森と水のつながりに着目した。そして、児童が尾上さんにお礼のお手紙をかき、オンラインで児童が森と水について調べたことを、尾上さんに発表してフィードバックをもらっていた。これで終わりではなく、校外学習で川上村を訪れ、尾上さんを始めとするたくさんの人とのつながりに気づき、新たに川のゴミの問題も発見したというものだった。それから、川の学習につながり、児童の問いを基に次の目標を設定していった。また、ゲストティーチャーに単発でお話をいただくのではなく同じ人と何回も関わることで最終的に、児童自身はゲストティーチャーの熱が伝わり問題解決の意識が高まったというものだった。児童自身が問題を自分ごととして考え、自分にできることをするとよいのだと気づけるようになることがわかるという成果が得られた、という内容の実践だった。

### ◆ 自分で考えたこと

ゲストティーチャーの使い方が非常に重要になるのだと感じた。多くの場合は、ゲストティーチャーを一度招いて、お話を伺ったら終わりになってしまいがちだ。しかし、今日の赤松さんの実践の紹介を聞いて、児童が同じ人と何回も関わることで、ゲストティーチャーの情熱を感じとり、問題を自分ごととして捉えられるようになるのだと分かった。だから、私は総合の学習として人やモノのつながりを学ぶときには、問題を自分ごととして捉えられるようにゲストティーチャーとの関わりを大事にしたいと思った。

また、社会の授業だけでなく他教科とも繋げていくことで、いろいろな側面から人やモノと繋がっていることを感じられるのだと考える。例えば、お話であったように、国語のお手紙を書いてお礼を伝えるという単元で、川上村の尾上さんにお手紙を書き、双方向でコミュニケーションをとったり、社会の水の単元とのつながりで、川を訪れたりすることで総合の学習にもつながってくる。こういう実践をしていくと、児童も人とモノのつながりに気づけるようになり、協力や、主体的な行動ができると思った。

素晴らしい実践には、学びだけでなく、児童の考え方、感じ方までも変えていく力があるのだと知った。

## 第四回 森と水の源流館授業づくりセミナー

社会科教育専修2回生 東 晃太郎

### ◆ 概要

村上先生(平城小学校)

川上村を訪れて、川の良さに気づき、身近にある秋篠川についての理解を深めるという授業実践である。最後のまとめとして、発表という形ではなく、川柳やカルタでまとめるという方法を計画中だそう

中本先生(田原本小学校)

森と水の源流館にあった「めぐる、めぐみ」というポスターを参考に、川上村の川と地元の寺川を比較し、水質に着目する。指標生物を学び、そこから生物の種類によって水質階級を理解する。ゴミなどの問題にも着目し、清掃活動なども行う方針である。

奥戸先生(平城小学校)

和歌山に修学旅行に行くため、和歌山県の魅力を伝えるリーフレットを作成する。修学旅行後に奈良交通の方に向けて発表をし、助言をいただく。改善をした上で、地元平城の魅力を伝えるリーフレットを作成する。

### ◆ 自分で考えたこと

今回は3名の授業実践を聞いた。まず、村上先生だが、秋篠川をテーマに川上村の川との比較されていた点が素晴らしいと思った。川柳やカルタを作ってまとめとすることも良かった。小学生のなかには、発表することが苦手な児童もたくさんいると思う。もちろん、人前で話し、対話的な学びを行うことは大切であるが、無理やりさせることはあってはならない。そのときにこれらのまとめをすることで楽しみながら授業のまとめを行うことができると考えた。また、森と水の源流館の古山さんがおっしゃっていた「川柳」は川という文字が使われており、何か関係があるのではないかとということも納得した。

次に、中本先生だが、指標生物から水質を学んで、川上村の川と比較するという点が素晴らしいと思った。ユスリカやサカマキガイなど普段聞かないような生物を知ることができた。これらの生物を授業で知ることができるのはとても貴重なことであると思う。小学生のアイデア、働きかけによって水質が改善される日を楽しみに待っている。

最後に、奥戸先生だが、修学旅行をただの旅行として終わらせるのではなく、学びのあるものに工夫されている点が素晴らしいと思った。本来の修学旅行の目的は何か学びのあるものを行うことなのだが、子どもたちは只々楽しんで帰ってくるのがほとんどだ。楽しむことは良いことだが、何か一つでも学びのあるものにしていくことが大切であると考えた。まとめの方法がまだ定まっていなかったようなので、地元の中学校と連携し、今の6年生が中学生になってからもこの学びが生かされるような工夫をされたらどうかという提案をした。それぞれの先生方の実践がどのような効果をもたらすのかを楽しみにしている。実践報告会の際に聞きたいと思う。



## 第五回 森と水の源流館授業づくりセミナー

社会科教育専修2回生 東 晃太郎

### ◆ 概要

川上村を題材とした授業実践報告 一都市・農村の変化と人々の暮らしー

(岐阜県岐阜市立長良中学校 堀先生)

地域の魅力を生かし、直面する課題に対して、独自の取り組みでたくましく乗り越えていこうとする力を養うために、「過疎化と向き合う川上村」のもと、授業を行っていく。年間予算の約4分の1にあたる10億円をあるものに使うことを示し、あるものとは水源地の森であることにつなげる。源流に住むものとしての使命や誇り、水源地の村であることを生かした村の活性化を意識できる子どもを育てる。

ぼくらがバトンをつなぐワケ

(和歌山県橋本市立あやの台小学校 中谷先生)

「考えることは自由でいいんだ ちがうことはおもしろいんだ 分かり合うことはすてきなんだ」ということをもとに、地元の様々な体験を行う。吉野川と紀の川のつながりを感じる。そこから、自分の存在を確認し、「つたえる つづける つながる つらぬく つきあう つなげる」をもとにこれからへとつなげていく。

「めぐる、めぐみ。」田原本町の水ー自分たちの川のはたらきを見直そうー

(奈良県田原本町立田原本小学校 中本先生)

社会科や総合的な学習の時間を使って1学期では、水のはたらきについての学習の一環で、森と水の源流館へ校外学習として訪れ、生き物や森林について学ぶ。2学期では、田原本町の水と川上村の水を飲み比べて味やにおいの違いを確かめる。3学期では、学習の成果を振り返って取り組みたいことを考える。看板づくりや寺川のゴミ拾いポスターの作製など、様々な形で成果を残す。

### ◆ 自分で考えたこと

3名の先生方の授業案をこれまでのセミナーで聞いてきて、それが実践されたことによる子どもたちの反応を知ることができた。まず、堀先生の実践について、社会科の教科書で登場した奈良県川上村を教科書の中だけの説明で終わらせることなく、水源地の森に多くの予算がかけられ、保全されていることを知り、それだけ大切にされている理由を理解することで自然を大切にすることを心がけることができるようになると思う。

次に、中谷先生の実践について、地元での様々な体験が良いと思った。和歌山県紀の川と奈良県吉野川のつながりから、地元について学び、奈良と和歌山のつながりを理解することができると思う。

「つたえる つづける つながる つらぬく つきあう つなげる」という6つの「つ」それぞれに重要な考えがあるように感じる。

最後に、中本先生の実践について、寺川をきれいにしていくという取り組みはとても良いと思う。同じ奈良県の川でも水質にこれだけの差が生じるのはなぜか、どうすればきれいになるのかを考え、行動に移すことが重要であると思う。

## 第一回 万葉文化館 授業づくりセミナー

### ◆ 概要

飛鳥における埋蔵文化財の調査と保存活用の実例を実地で紹介したり、学校教育でそれらをどのように取り上げるかについて検討したりした。見学の順番は、飛鳥京跡苑池→飛鳥京跡→川原寺跡→川原寺跡北方工房跡の順である。

### ◆ 自分で考えたこと

今回のフィールドワークで私が考えたことは3つある。

一つ目はさまざまな科目を絡めた授業づくりをしていきたいと考えた。一見何も関わりがなさそうな万葉集とSDGsであるが、万葉集に載っている「采女（うねめ）の袖吹きかへす 明日香風（あすかかぜ） 都を遠み いたづらに吹く〈志貴皇子（しきのみこ）〉」という歌から都が遠くなったという開発の観点からSDGsと絡めて考えるという話を聞き、すごく面白そうだと感じた。もしSDGsに興味薄いというような生徒もその他の教科と絡めてみることで、楽しく授業を受けることができると考えた。

二つ目は、文化財を現地に行って五感で感じるということだ。橘寺を訪れた際に最も強く感じた。橘寺と川原寺は入口の方角が異なるということから建設時期の違いを読みとることができた。史跡が一見石のように見えるが、実際に踏んでみると中が空洞になっていたりすることから文化財の保護方法の時代による変化を感じた。実際に見てみると、史跡が大理石であり他の国から運んできたことも分かった。実際に現地に足を運び五感を使わないとわからないような発見や良さがたくさんあった。子どもたちと一緒に授業などを通して見学したいと強く感じた。

三つ目は、情報技術の発展などを利用し、小さな子たちにも歴史を伝えたいと感じた。ストーリー性を意識したコンテンツなどを作り、より身近に分かりやすく、そして楽しい飛鳥の文化を伝えていくことでもっと良さが広まると考えた。

（国語教育専修1回生 山下 絢捺）

### ◆ 自分で考えたこと

もし将来私が奈良県の教員になったら、今回のフィールドワークで学んだように、身の回りの自然から感じられる歴史に目を向けるような指導・授業を行いたい。

日頃から自分の周りに広がる世界に積極的に目を向けることで探究心が身につく、さらには自分もその世界の中で成長しているということが実感できるのではないかと考えた。

（国語教育専修1回生 三宅 紗羽）

### 第三回 万葉文化館 授業づくりセミナー

社会科教育専修2回生 東 晃太郎

#### ◆ 概要

中学校第3学年国語科単元構想案

「古人の思いを想像し、自分の気づきを未来へつなげよう」という単元名のもと、歴史的背景に注意しながら万葉集を味わうことを大きな目標とされていた。まず、知る・出会う導入として、ポルノグラフィティのアポロを聞かせて愛の形という歌詞から恋の歌に親しみを持つ。次に、広げる展開として、万葉集を読み、恋の歌やその他の和歌にも触れて、万葉集にはジャンルがたくさんあることを理解する。そして、深める展開として、万葉集という歌集は約1300年前に誕生したことを説明し、どのようなものか、なぜ長い間残って語り継がれているのだろうか、当時の表記はどのようなものかなどを知って万葉集の細部を理解する。最後に、伝えるまとめとして、お気に入りの和歌に関する紹介文を書き、万葉集の受け継ぎ手になる。歌ごとにまとめて文集として一冊にまとめて本単元は完結する。

ESDとの関連として、責任性が挙げられた。万葉集を未来へと受け継いでいくことが重要である。重視する能力・視点ではコミュニケーションを行う力、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度が挙げられた。和歌について、自分の考えをまとめると共に相手に伝えること、万葉集が古代から現在へとつながってきたこと、自分が文化の受け継ぎ手になることを理解することが大切である。関連するSDGsの目標は目標4「質の高い教育をみんなに」、目標11「住み続けられるまちづくりを」、目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」である。どの目標も重要でこれらが達成できるような単元構想案であった。

#### ◆ 自分で考えたこと

この単元構想案は大変素晴らしいと感じた。流れだけでなく、そのときにどのような力を養うことができるかなどがきちんと説明されており、授業を想像しやすい構想案だった。導入がとても面白く、生徒たちが万葉集に対して興味を持つような工夫がされていると思う。JPOPと万葉集はどちらも歌であるということを強調することで万葉集とは何なのかをより理解しやすくなるだろう。万葉文化館でBGMとして流れている新井満さんの「君待つと」の歌も良い歌だと思う。現代のメロディーで万葉集を歌うのも楽しい。音楽科との関連も良いと思う。また、目標にあった歴史的背景に着目しているのは社会科との関連性もあり、教科横断型の授業が展開できると考える。可能であれば社会科で飛鳥時代を扱うタイミングで、国語科でこの単元を行うのも面白いのではないかと思う。明日香村へのフィールドワークや万葉文化館からゲストティーチャーをお招きして話をさせていただくことも効果的だ。まとめとして紹介文を書いて終わりというのは少し弱くなってしまわないかとも私も考える。そこで、及川先生がおっしゃったように、まとめの方法を選択できるようにする、つまり自分なりのまとめ方を見つけることが良いと思う。私が専攻している地理学の授業でもまとめの方法を最終レポートだけに限らず、動画を作ったり、絵を描いたり、何か作品を作ったりとまとめる方法を選択することができる。文章を書くことは苦手でも、絵を描くことは得意だという生徒がいるため、限定せずに自由にできる方法が良いと考える。

## 第四回 万葉文化館 授業づくりセミナー

音楽教育専修3回生 後川 りの

### ◆ 概要

万葉集に関する構想案の検討

#### 【授業構想】

万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の歌が国語の教科書に載っているそれぞれの特徴を調べさせる→その中で最古の万葉集に目を向けさせる  
沫雪のほろほろに降りしけば奈良の都し思ほゆるかも（大伴旅人）  
あをによし奈良の都は咲く花のにはほふがごとく今盛りなり（小野老）  
「あをによし」って何だろう？そこから調べたり考えたりさせたい。  
奈良にまつわる歌が数多くあることに気づき、歌碑を調べさせたい。  
フィールドワークで歌碑を見つけ、そこに書かれた歌の意味を考える。  
自分たちでも歌を作ってみて、そこに音もつけさせたい。  
学習が終わったときに、短歌や万葉集について身近に感じてほしい。



#### 【意見交流】

- ・単元名にある「君待つと」は、新井満さんの歌で万葉文化館でも流れている。この歌は導入で使えるかも。
- ・文字がない時代に声の文化として始まったのだから、音楽としての万葉集を捉えることから始めてはどうだろうか。
- ・万葉集は歌であると考えたら、この場合国語でというよりは音楽でやった方がいいのでは。
- ・声明（しょうみょう）だって一種の音楽のはず
- ・楽譜におこしてみると何らかの特徴が見えてくる
- ・音声言語と文字言語を考えたときに、音声がいかに大事かということが感じられるといい。
- ・歌の背景を知ることで、もしそこに曲をつけるなら短調になるか長調になるかという活動ならきっとおもしろい。

### ◆ 自分で考えたこと

国語科の学生や国語を専門とされてきた先生方、それから万葉館の先生方が集まる場に「万葉集のことを知らないから知りたくなった」という理由だけで音楽科の自分がその場に飛び込むことは、とても怖かったが参加してみると、知識や経験の塊でどんどん色んな方面からアドバイスを頂けるので、こんな貴重で贅沢な時間は無いと思った。おそろおそろ発表したが、みなさんの万葉集に対する熱い想いを感じ、これからどういう指導案にしようかと考えるだけでワクワクするようになった。

結果として、万葉集の指導案を考えると自分の中で国語を軸に考えないといけないと、またESD連続セミナーの時と同様型にはまってしまった。ただ固いイメージだった万葉集に、人の出会いを感じ、それを児童も感じられるような指導案を作っていきたい。

## 第五回 万葉文化館 授業づくりセミナー

社会科教育専修2回生 東 晃太郎

### ◆概要

いにしへの歌に仮託して自分の思いを伝えよう（川田さん）

川田さんの母校にある万葉歌碑の謎に迫る授業案であった。万葉集とは何かについての理解と漢字を用いた表記方法を理解することが教材観であり、万葉歌碑に込められた思いを理解させることが指導観であった。授業展開としては、万葉仮名を学び万葉歌碑を解読する。複数の万葉集の思いを考えながら鑑賞し、作者についての調べ学習を行う。そして、自分の万葉歌碑を立てようとしたうえで、万葉歌碑を作成する。作成したお互いの万葉歌碑を見て、思いを読んで感想を持つ。ESD との関連としては多様性と有限性が挙げられた。つながり・文化を尊重することが大切である。目標は4「質の高い教育をみんなに」、11「住み続けられるまちづくりを」であった。

オリジナルの和歌を作ろう～万葉集から想いを馳せて～（後川さん）

万葉集を音楽的視点から考える授業案であった。万葉集は身分を問わず歌われており、当時の人々の考えや思いを知ることが教材観であり、音楽がない声だけで構成されている歌を知り、万葉歌碑データベースからペアで上の句・下の句を分けて作ることを伝えることが指導観であった。授業展開としては、音楽がない歌を聞き、万葉集にも音がないことを理解する。万葉歌碑データベースから気になる万葉集を探して背景や意味を予想し、音をつけてみる。ペアで上の句・下の句を作り、音をつける。ESD との関連としては多様性と相互性が挙げられた。進んで参加する態度、世代間の公正、文化の尊重が大切である。

### ◆自分で考えたこと

まず、川田さんの授業案について、万葉歌碑は奈良県民としてはとても馴染みのあるものだが、他府県の人にはなかなか触れる機会がない。万葉集は北海道と沖縄県以外の場所では歌があるといわれている。それぞれの場所での歌を知ることが大切であると、今回の授業案から考えた。身近な歌に気づくことができ、それによって地元愛も深まるのではないだろうか。この単元を学んだあとで、またはじめの万葉歌碑を考えてみるという意見に納得した。学ぶ前と学んだあとでは歌に込められた思いの理解にも変化が生じると考える。ぜひ実践していただきたい授業案であった。

そして、後川さんの授業案について、万葉集というと国語科や社会科で扱う内容であると思うが、万葉集は文字ではなく歌であることに着目すると音楽科で扱うことができることに気づいた。万葉歌碑データベースから万葉集を探し、その万葉集に音をつけるという作業、いきなりは難しいと考える。そこで、万葉文化館の一般展示室にある様々な調で歌われた音源がある。それを生徒たちに聞かせたり、あるいは教員自身がピアノで音をつけたりして例を提示することが大切であると考えた。参考音を提示することは音を考えやすくなるだけでなく、音楽科の学習指導要領にある鑑賞の領域や表現の領域にも生かすことができると考える。こちらの授業案もぜひ実践していただきたいと思った。

## 第一回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

#### SDGs の基礎的理解 (1)

SDGs が提案された背景、SDGs が目指す世界、SDGs の枠組みと特徴、SDGs の達成に向けた教育について講義を受けた。

### ◆ 自分で考えたこと

今回のセミナーでは、SDGs が提案された背景について理解し、これまでの自分の実践を批判的に振り返るとともに、今後どのように実践を行っていくべきか、考えを改めることができた。

私は今まで SDGs や ESD に関する多くのセミナーを受けてきて、深刻な地球規模の課題がたくさんあることは分かっている気になっていた。しかし、実践を行うなかで、子どもたちに自分ごと化させやすくするために、地球温暖化といった身近な課題ばかり扱うようになり、国際問題といったトピックからは逃げてしまっていた。そういった深刻な課題こそ、未来をつくる子どもたちに考えさせるべきだと思う。今回 SDGs が提案された背景についてのお話を聞き、課題について改めて危機感を抱くことができた。

### ◆ 自分で発展させたいこと

一見身近でないように見えても、つながりを探したりどうすれば自分ごと化できるか考えたりして、SDGs の達成に向けて取り組もうとする人を増やしていきたい。私は今まで自然環境教育や地域学習に力を入れてきたので、特に飢餓問題や貧困問題、国際問題、平和学習といった分野にも関心を広げ、考えを深めていきたい。

(英語教育専修3回生 川口 綾菜)

### ◆ 自分で考えたこと

自治体では SDGs に対する意識が向上しているのに対し、将来を担う子を育てる、教育の場ではあまり SDGs が意識されていないのは問題だと感じた。私は大学に入って初めて SDGs を知った。一回生のときに ESD の授業を受講したが、必修だから受講しているだけという受講生が多いように感じた。SDGs なくして教育を語れるか、とあったが、SDGs の授業をするだけでなく授業を受ける側が問題意識をもって主体的に捉え、意欲的に学ぼうとする姿勢も大事だと感じた。

(家庭科教育専修2回生 中畠 千智)

## 第二回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

SDGs の理解促進(2)

【SDGs を巡る国内の諸課題と ESD for 2030 の国内外の動向】

環境問題（海洋ゴミ）…増え続ける海洋ゴミによる生態系や人間の健康の影響  
⇒持続可能な生産と消費を実現する社会へ

○絶対的貧困：1.90 ドル／日

日本の貧困率は OECD の平均を上回る。「弱者に冷たい国」

○相対的貧困：日本 122 万円未満／1 年

日本の貧困率は 14～15%，母子家庭では 50%が貧困

### ◆ 自分で考えたこと

今回印象的だったことは、貧困の問題についてだ。日本は先進国として、各地域への支援を行っているものの、想像していた以上に貧困率が高いという現状を知った。他の授業で貧困の連鎖について考えたことがあったが、大学に来て教師を目指している人は恵まれているのではないかという問題提起がなされた。私は、教師を目指す者として貧困の問題を各家庭の問題として流してはいけないと考える。一方で、何ができるかと考えるとまだ分からない。貧困を理由に何かを諦めるという環境を防ぐことが教師には必要だと考える。触れづらい問題だが、そこに関わることができる第三者も少ないだろう。今一度、日本の現状に目を向け、教師として一大人としてどう関わるべきか考えていきたい。

(社会科教育専修 3 回生 北野 結衣)

### ◆ 自分で考えたこと

貧困と教育について、及川先生は被災した子どもたちへの奨学金に携わっていると聞いた。私は中学生のときに「貧困の負の連鎖」という言葉を知った。データによると、子どもたちの 7 人に 1 人は相対的貧困状況にあり、一人親では 2 人に 1 人がそのような状況にあるようだ。しかし、この大変な状況の改善には教育やお金だけでは救いきれない。及川先生は「社会資本ではなく社会的資本」という言葉を話されていた。人とのつながりや経験が少ないと連鎖は断ち切れないため、そういった面を充実させていくことも大切だと分かった。学校現場では社会的資本を充実させることができると考えられるため、それを意識した上で子どもたちと関わっていききたいと思う。

(英語教育専修 3 回生 川口 綾菜)

### 第三回奈良 ESD 連続セミナー

国語教育専修3回生 川田 大登

#### ◆ 概要

7月7日、第3回奈良 ESD 連続セミナーが開かれた。講師は奈良教育大学附属幼稚園、副園長の長谷川 かおり先生であった。具体例を交えながら幼稚園に通う子どもたちの保護者の心理と対応を詳しくお話しいただいた。初めての子育てを経験する保護者は誰もが必死であるが、初めての集団生活の場となる周りの子どもと我が子を比べることで不安になったり焦りを感じたりする保護者の方が多いことが分かった。そのような保護者に対して、先生は丁寧に子どもの説明をし、保護者の気持ちに寄り添って、「頑張りすぎなくて良い」というアドバイスを送っていらっしやった。

#### ◆ 自分で考えたこと

一番印象的であったことは保護者が必死であるということである。私たちの世代が新任のときは、子育てを経験していないので保護者の気持ちが分からない上、新任で自分が必死であるため、保護者の気持ちを考えられず、敵対的な対応になってしまう可能性があるのではないかと考えた。今日のお話をきいて、「保護者は一番に子どものことを思って自分に連絡をしている」という認識を持って、誠実に対応にあたることが重要だと思った。また、先生が最後に話されていたが、新任の教師は保護者に不安に思われるだろう。ただ、毎日精一杯、真剣に子どもに関わればそれが保護者にも伝わって信頼関係につながるのだから、心掛けたいと思う。

また、このセミナーの途中で、保護者の日めくりカレンダーの言葉が話題になっていた。どれも素敵な言葉だと思うが、「ま、いっか」などの言葉が有効なのはあくまでも精一杯頑張っている状況下においてであると思う。保護者はもちろんそういう状況にあると思うが、未熟な教師ができない言い訳にこれを使うのは良くないと、自分へのいましめとして感じた。

(国語教育専修3回生 川田 大登)

#### ◆ 自分で考えたこと

「安心して子どもたちが力を発揮できる場をつくる」ということについて、附属小学校での実習で考えた、「学校は安全で安心できる場であるべき」ということに近いと感じた。「安心できる環境」をつくるのが、子ども達にとっては自分らしく成長するために重要である。そのうえ、保護者の人にとっても自分の子どもを預けるうえで欠かせない要素になるだろう。

教員として子どもと関わるのが大半だが、保護者の方々と信頼関係を築きながら、子どもを育てるということにおいて、協力していけることが理想的であるため、保護者との関わりを軽視せずに丁寧に関わっていきたい。

(特別支援教育専修3回生 西田 有佳里)



## 第四回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

- ・ 蔵前拓也先生 「まみいちから伝える竹取物語の魅力～万葉集 古典に親しもう～」  
「竹取物語」を題材とした小学6年（総合的な学習の時間）における実践発表
- ・ 大西浩明先生 単元構想案の作成方法

### ◆ 自分で考えたこと

蔵前先生の実践の中で、子どもたちが学校を飛び出して、地域や社会とつながって学習していたことに興味を惹かれた。学習を通して、自分たちのまちについて理解を深めるだけでなく、学んだことを下級生に発信し、実際に和菓子やくつ下をデザインするなど行動を起こしていた。また、子どもたちが机の前で学ぶだけではなく、たくさん人に話を聞き、行動化することで、感じたこと、考えたことを活かしていく姿に、学びの連続性を感じた。子どもたちが「学びを続けられる」「楽しみながら学べる」という授業をすることは難しいが、教員になったときにも教材研究等にできる限り時間を割き目の前の子どもにあった授業をしていきたいと思った。

（特別支援教育専修3回生 西田 有佳里）

### ◆ 自分で考えたこと

地域に古くから伝わる話題を題材とし、地域の企業・和菓子屋の協力のもとこんなにも地域と濃厚なつながりの中で学習が進められるのだと感動した。子どもたちが主体となって活動し、地域で働いている方々、特産商品といったように地域について多面的に見つめ、たくさんの結びつきの中で地元の素晴らしさを各方面から感じるができるだろう。それは、郷土愛の形成に大きく貢献すると考える。また、企業の方も子どもたちが学んでくれることに対して喜びを感じて下さっており、学校教育を通して地域の方と子どもたちの両者にとって幸福感を感じられる事業を行えることは素晴らしいと感じた。

（音楽教育専修3回生 藤本 尋巳）

### ◆ 自分で考えたこと

この実践のポイントは地域素材の充実した活用と行動化の充実であると思う。『竹取物語』にゆかりがある土地であることを生かして、最初は興味の低かったそれを、発信したいと思えるまでに調べさせ、魅力に気づかせていた点がすごいと思った。また、「行動化」の部分在今后どうしていくか考えるだけではなく、実際にモノとしてつくらせたところに大きな意味があるのではないかと思う。

やはり、身近なものや体験や実物を授業で用いることは重要だと改めて感じた。

（国語教育専修3回生 川田 大登）



行っておられるように感じた。学生である私たちには、目の前に子どもの姿を思い浮かべることに対して困難さはあるものの、イメージすることが必要である。また、教員になったときには「子どもの姿」を忘れずに授業を作っていきたいと考えた。

(特別支援教育専修3回生 西田 有佳里)

## 第六回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

#### ・フードロスについて

最近給食を残す児童が多いことからフードロスをテーマにした単元構想案が出ていた。まずはスーパーなどで手前取りについてどう考えるかなどで導入を行っていた。

#### ・曾爾村について

曾爾村は日本で最も美しい村連合に加盟している自然豊かな地域だ。曾爾村の小学校が小規模校であることを活かして児童たちが活発に意見を交わし村の魅力を再発見する単元構想案が出ていた。

### ◆ 自分で考えたこと

フードロスと村の良い所を他の地域へ発表する授業の内容だった。フードロスは大変話題になっている、重要な問題である。生産者や栄養士の方へ実際に話を聞きに行くといった現場の声を大切にした授業展開であった。現場の声はとても大切であり、児童達の考え方も少し変わるのではないかと思った。

村の発表について、舞台は曾爾村であった。曾爾村には曾爾高原という有名な観光地がある。生徒達は自分の周りにある郷土の価値に気づけていないのではと感じた。実際に外部からの評価を知ることで改めてその地域が評価されていた事に気づくかもしれない。また地元の子達は地元民だからこそ知っている地域の良さを知っている(四季の様子や地元の祭り、文化など)。その良さに気づかせて引き出すところに村の価値を見つけることが出来るのではないかと思った。

(心理学専修3回生 木村 直希)

### ◆ 自分で考えたこと

今回は現職教員の単元構想案の相互検討を行った。発表されたテーマは動物園を題材にした子供たちに「ゆたかさ」とはなにかということを教えたり、地域の商店街を題材にどうして人々が足を運ぶのかなどを考えていったりなど多岐にわたる構想案・実践案が出てきてとても興味深かった。自分自身初めて聞いたウェルビーイング(健康)の考えから狭い意味での健康ではなく、社会全体でのゆたかさを考えることの重要性についても議論できたので、とてもレベルが高い話し合いがされていた。少し、自分として反省しなければならない点としては、話し合いにあまり参加できなかったことが挙げられる。その次の商店街の実践では話し合いに参加できたが、自分がただ聞くだけではなく、自分が作るならどうするかということをもう少し考えていくことが大切であると感じた。

(教育学専修3回生 木下 結等)

## 第八回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

島先生「吉野小桜プロジェクト 10年目」小5

目指す子どもの姿は、吉野の桜の魅力を地域に発信したり、桜ウォーキングを企画・運営したりして、桜をシンボルとした吉野のまちづくりの実施活動に参画し、地域に貢献することができる。

長谷川先生

現在、幼稚園・こども園での子育て支援を求められている。遊びは、他者とイメージを共有することができ、それを通して、他者の存在に気づいていくようになる。また、保育者は子どもの内的活動に注目することが大切である。そのためには、子どもの行動を認めることが重要で、認めてもらえる環境があるということを経験させる必要がある。

長塩先生 小学校 小5「フラワータウンプロジェクト」

笑顔で住み続けたいような町にすることが、自然環境保護や人とのつながりを醸成する。

### ◆ 自分で考えたこと

幼児を対象とした指導案を見る機会がなかったため、幼児本人が学んでいると思っていなくとも学んでいるという仕掛けをしているところが新しく、学校でも取り入れていく必要があると感じた。遊びのなかで学んでいる幼児は、何気ない日常ですら学びであることを改めて理解することができた。また、保護者にも遊びの意図を伝えることで、同じ遊びという時間でも学びの量を増やすことができると感じた。

学校で毎年取り組んでいるものに対して、価値を見出させることは難しいと感じた。該当学年になったらやるものになってしまえば、やらされている活動になってしまうため、低学年の頃からその活動に触れ、自分もその活動がしたいと思わせることが大切だと考える。また、小・中連携により学びを継続させるということが、学んだことを形にするだけでなく本当に自分事化させるために必要であると感じた。

(家庭科教育専修3回生 宇和谷 紗恵)

### ◆ 自分で考えたこと

子どもたちの声を拾ってそこから授業を展開していくところがどの先生も共通していた。計画を超えてくる子どもたちの発想や考え方をさらに授業で深めていくことが、探究的な学びに繋がっていくことを実感できた。また、長期的な学習の際に、学びを止めない工夫があった。教科横断的な学びのなかでは、地域の魅力を見つけて発信する授業のなかで、国語の伝えるという単元と繋げたり理科の自然と繋げたりと関連のある単元や内容から教科同士を繋げていた。生活や他の教科で学んだこと分かったことと繋がることで、より身近なものに感じることができたり、繋がった時にまた学んだ内容が深まったりして、よりよい学びに繋がる。

(教育学専修3回生 中家 麻弥)

## 第九回奈良 ESD 連続セミナー

英語教育専修 3 回生 川口 綾菜

### ◆ 概要

#### 学習指導案の検討（2）

### ◆ 自分で考えたこと

3 人の先生の ESD の授業実践を聞いた。稲葉先生は米作り体験を通して地域とのつながりを強化できる授業だった。アンドリュー先生は汎用性の高いアクティビティを ESD の視点から作られたため、おもしろいと感じた。

貴島先生の実践は森林環境教育だったが「人」に焦点を当てられていて、キャリア教育の要素も含まれていた。私は、森林環境教育といえば、森の循環や生物多様性の話になるというイメージを抱いていたが、人に焦点を当てるという発想が新鮮だった。人の営みを感じると愛着が湧くため、今後どんな教材で ESD を実践することになっても、「人」という要素を取り入れるようにしたいと思った。

### ◆ 自分で発展させたいこと

考えたこととして、「人」に焦点を当てることについて記載したが、人の中でも「生産者」と「消費者」といったように様々な視点で物事を考えることが大切だ。私の考えた授業では「外国人」と「日本人」の二つしか視点がなかったため、もっと多面的に捉えようと思った。例えば、まちで暮らす多様な人々として、高齢者や子ども、障害のある人などが挙げられるだろう。また、多様な文化としてキリスト教徒やイスラム教徒などの視点も取り入れると、より考えが深まるのではないかと思った。

(英語教育専修 3 回生 川口 綾菜)

### ◆ 概要

今回は現職の先生方による ESD 学習指導案の相互検討があった。私は中澤先生が司会をされているグループに入って 3 人の先生の実践を拝聴するとともに、ご質問をしたり感想を申し上げたりした。

### ◆ 自分で考えたこと

特に三人目の先生が実践に取り組もうとされたきっかけについて述べる。この先生は 6 月にあった、奈良教育大学 ESD・SDGs センターキックオフイベントでの基調講演で高須先生が子どもの権利条約を取り扱ってほしいとおっしゃったことをきっかけに実践を作られたそう。

奈良教育大学には学びの機会が特に今年度から多く存在する。一見、その内容が自分と関係ないように思えるかもしれないが、そのような機会に積極的に参加する意義を強く感じた。このような学びの機会を逃さず、一つ一つを自分のものにしていきたいと強く思った。

(国語教育専修 3 回生 川田 大登)

## 第十回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

現職の先生と学生が作成した ESD 指導案の相互検討

### ◆ 自分で考えたこと

私は、岸和田だんじり祭りでは演奏されている地車囃子についての指導案を作成し、検討していただいた。そのなかで、お祭りを見るものだけではなく聞くものとしても捉える部分がおもしろく、いろんな視点でお祭りを見ることで多様性について子どもが考えることが出来るとおっしゃって頂いた。さらに、お祭りはやり回しをする人だけではなく、出店の人やお祭りを見に来るお客さんなど多くの人が関わっているため、そういった視点を大切にすべきであると学んだ。このことから、多様な視点や人との関わりについて子ども自身が学ぶことで、より自分事化しやすくなるのではないかと感じた。

さらに、だんじり祭りは開かれたシステムであり、見ることもお祭りに参加していくことになるため、子ども達もお祭りを支えているという意識を感じられる。子ども達が大切に受け継がれてきたお祭りに参加できているという実感を持てることも授業で大切にしていけるべきではないかと感じた。

次に、家庭科の学生さんが大和野菜についての指導案を作成されていた。学校給食との関わりを指導案に含まれている点が、子どもの興味を引きやすいポイント作りになっていると感じた。授業を作るなかで、子どもの興味を引くことは重要であると改めて感じた。

最後に、現職の先生がお祭りカレンダーを作成するという指導案を作成されていた。そのなかで教科を横断した関わりについても説明されているのを聞いた。大学でも教科横断型授業についてよく聞いていたが、現職の先生の指導案や説明からも実際の取り組み方を学び、なぜ教科横断型が大切なのかを深く学ぶことが出来た。この視点は、ESD 学習指導案だけではなく、全ての授業づくりの際に必要なようになってくると感じた。

(音楽教育専修 3 回生 森 絵里奈)

### ◆ 自分で考えたこと

児童に何を伝えたいのかによって活動の順番も変化することが分かった。

私の指導案では「しらべる」の中でも、①調べる、②お茶を飲む、③話を聞く、の3つの活動を考えた。アドバイスをいただいた中では、「お茶のでき方、違い」にスポットを当てるとすると、①調べる（質問内容を考える）、②機械摘みのお茶を飲む、③話を聞く、④手摘みのお茶を飲む、という活動の流れが良いとのことだった。

これによって、私の活動の順番では音楽の歌詞を理解すること、音楽と茶摘みの文化とのつながりを知る、という2点を実践できるが、アドバイスをいただいた活動ではより茶摘みの文化やお茶について知ることができる。

このように、教員が児童に何を感じて、考えてほしいのかを明確にし、そこから活動計画を考えていくことが大切だと分かった。

(音楽教育専修 3 回生 松岡 花)

## 第十一回奈良 ESD 連続セミナー

### ◆ 概要

- ・教職の方々の指導案検討
- ・学生の指導案修正

### ◆ 自分で考えたこと

長友先生の実践を聞いて考えたことは、以下のようなことだ。

言葉だけではなく、絵や作品などの芸術で自分の気持ちや思いを表現することについて考えさせられた。感じたことを自分で表現することが自分事化することで、これからも大切にしていきたいことという ESD の視点に繋がってくると気づけた。また、硯を作るという発想の根源が、学生との雑談だったと聞き、身近なところからでも見つけられる ESD の視点はあるのだと思った。ESD ティーチャーの指導案を考えると、まだまだアイデアがなく、作り出すところが最も時間がかかり、ソマティックマーカが働いていないと実感した。どんなことでも、自分の経験や感じたことから ESD に繋がるような視点を見つけられるように、まずは意識化に置き、常にアンテナを張っていきたいと思った。

(教育学専修 3 回生 中家 麻弥)

### ◆ 概要

学習指導案の相互検討  
研修の振り返り

### ◆ 自分で考えたこと

お二方とも実際に授業に参加したいと思う学習指導案だった。それは、これまで体験したことがない内容だったからだろう。総合での活動と社会が繋がることはあっても、美術は聞いたことが無かった。美術は一つの作品を創作して終わりというイメージだったが、墨と硯というどちらも片方では使わないものを自ら作るということに面白さを感じた。硯も普段使っているプラスチックのものとは色味も形も異なり、愛着が湧くのではないかと思った。書写にも繋がると思った。商業科の学習指導案については、まるごと ESD だと感じた。その理由は、社会の課題を把握、分析し、次に繋げるという一連の単元展開の中心には生徒がおり、生徒自身が問題意識を持ち実践していくからだ。小学校でも作ってみたいと思った。

(社会科教育専修 3 回生 北野 結衣)

## 一年間を振り返って

この1年は、奈良教育大学のESD事業が大きく推進しました。奈良教育大学にESD・SDGsセンターが発足し、キックオフイベント等の設立イベントが多く開催され、新型コロナウイルスによって規模が縮小されていたセミナーも復活しました。様々な団体の方との連携した取り組みが多くなったことで、出前授業や野外活動支援、国際交流など活動の幅が大きくなりました。私は、今年度未来事業やイオンモール奈良登美ヶ丘におけるワークショップなどの実践、春日山原始林や、万葉集を活用した授業づくりセミナーなどの演習と様々な事業に携わらせていただきました。私は、1回生であったため、力不足を感じたこともありましたが、先輩方や先生方のご協力で達成することができました。

奈良教育大学には、ESDを積極的に学び実践力を高めようとする学生がたくさんいます。今後も全体で、多様な取り組みを進めていきたいと考えています。

(国語教育専修1回生 田中 愛花)

## 次年度に向けて

次年度に向けて、様々な団体の方々と連携した取り組みをより積極的に行っていきたいと思います。今年度、他団体との連携が必要な活動に参加したり活動内容を聞いてきたりしてきました。そこで、関わらせて頂いた方々からのESDの活動内容についての質問が、「ESDについて知っているが何をしたら良いか分からないから」という理由からくるものが多かったことが印象的でした。反対に、自分自身が知り得なかったESDの視点や活動内容についても多くのことを学ぶことができました。このことから、自分たちに求められていることは、ESDについて発信することや、より良いESDの活動となるよう行動することではないかと考えます。そのために、フォーラムに参加し沢山の方と関わる機会を持つことで後の取り組みに繋げ、意見を出し合い様々な視点から活動を柔軟に考えていきたいと思っています。

(国語教育専修1回生 吉岡 優来)

## 編集委員より

今年度、ポートフォリオには数多く報告がありました。中澤静男先生を中心に以下の3名の学生編集委員で掲載分を選出していきました。

英語教育専修2回生 苗代昇妥

国語教育専修1回生 田中愛花

国語教育専修1回生 吉岡優来

この報告書に掲載されているポートフォリオ以外にも掲載したいものがたくさんありましたが、断腸の思いで選出いたしました。

編集活動を行いながらこの一年間を振り返っていると、コロナ渦以降では最も活発に活動できた一年だったと思います。コロナの感染対策に気を付けながらも、実践的活動やセミナーを通して、多くの学びを得られた一年間だったと実感しました。陸前高田市文化遺産調査団のようなコロナ渦以前に行っていた活動が再開したり、今年度初めての活動を行ったりすることもできました。

私たち編集委員は、この報告書を編集しながら様々なESD活動を目にし、大変刺激を受けました。今後も、学生としてESDについて学び将来へ生かしていきたいと思っています。

(英語教育専修2回生 苗代 昇妥)



2022年度

奈良教育大学E S D学生生活動実施報告書

2023年3月31日

近畿E S Dコンソーシアム 国立大学法人奈良国立大学機構 奈良教育大学

印刷：共同プリント株式会社

